

ジャワにおける陸軍中野学校出身者の情報・工作活動 とその影の局面

——柳川宗成大尉の遺稿から——

澤 田 次 郎

はじめに

- 一 戦場に出るまでの教育（Ⅰ）——拓殖大学
 - 二 戦場に出るまでの教育（Ⅱ）——中野学校
 - 三 情報・工作活動の影の局面
- おわりに

はじめに

一九四二（昭和一七）年三月一日深夜、日本の第一六軍はオランダ領東インド（現インドネシア）のジャワ島に上陸を開始した。

第一六軍は主力の西部ジャワ上陸部隊、ならびに東部ジャワ上陸部隊の二手に分かれて上陸を行い、進撃を開

始する。その目標は首都バタヴィア（日本占領後、ジャカルタに改称）、および連合軍の軍事上の本拠地バンドンであった。日本側は戦意を失いながら敗走する蘭印の連合軍を追撃し、三月七日、バタヴィアに第一六軍司令部が入城するとともに、バンドンの守備軍が降伏を申し出た。九日、在蘭印連合軍は正式に全面降伏し、以後、ジャワ島は約三年半の間、日本の軍政下に置かれることになる。⁽¹⁾

ジャワにおいて第一六軍参謀部別班（特務機関）が様々な情報・工作活動を行ったことはかなりの程度まで知られている。その概要については、とくに中野校友会編『陸軍中野学校』の第Ⅱ部・第四編第九章「インドネシアにおける諸政策」が詳しい。ジャワ攻撃に先立ち第一六軍司令部では村上公亮大佐と厨次則少佐の下に一一名の陸軍中野学校出身者が配属され、情報収集以外に橋梁確保や飛行場占拠などの特殊任務が命じられた。連合軍降伏後は、厨少佐の命を奉じた丸崎義男大尉がバタヴィア（以下、ジャカルタで呼称統一）において、第一六軍の中野学校出身者全員と従軍通訳約一〇名から成る参謀部別班を編成し、同市プラパタンガンビル六四番地に事務所を開設する。別班は間もなく人員を拡大し、バンドン、ジョクジャカルタ、スラバヤに支部を設けたが、それらの支部はさらにジャワ島全体に細胞を広げて情報工作のネットワークを築いていった。⁽²⁾ 開設当初の別班の主要任務は次のようなものであった。⁽³⁾

- ① 各種情報の収集と整理報告
- ② 旧蘭印特高警察の実体とジャワ共産党の解明
- ③ ジャワ・フリーメーソン組織の解明
- ④ 対外放送の指導掌握

その後も別班は種々の情報・工作活動にあたり、人員は一九四四（昭和一九）年秋には將校二〇数名、下士官兵一〇数名、嘱託軍属六〇名に達し、さらに一九四五年になると遊撃戦準備のため新任少尉四五名を加えることになる。そこに至るまでの主な工作は以下の通りである。⁽⁴⁾

- ① 回教工作（回教社会の内情把握、回教諸団体・長老を日本側に協力させる）
- ② 華僑情報の収集と工作（経済流通機構を握り、独自の情報をもつ華僑の協力をはかる）
- ③ インド連盟の指導（インド連盟本部と支部を設置し、ジャワ在住インド人を指導）
- ④ インドネシア青年教育（タンゲラン青年道場で特殊勤務要員養成や軍事教練を実施）
- ⑤ ジャワ防衛義勇軍の設立と同軍幹部の教育訓練
- ⑥ 対オーストラリア工作（宣伝放送の実施、映画製作、豪州放送傍受、俘虜からの情報収集、海上での諜報・防諜）
- ⑦ 遊撃戦準備（イ号勤務隊、ロ号勤務隊、浪機関、華僑特殊勤務隊、遊撃隊資材班の創設）

以上のすべてが中野学校出身者のみによって行われたわけではない。しかし別班はそれ自体、丸崎大尉以下二名の中野出身者によってスタートし、その後新たなメンバーが加わる中で、丸崎、土屋競、富木正二、三宅見徳、米村政雄、橋詰象資、吉武智嘉男、星野鉄一、六川正美、東一二などの將校、片山康次郎、熊谷正男、夏井義男といった下士官の、いわゆる「中野出」が主要な任務を遂行し、重要な役割を占め続けた。⁽⁵⁾

そうした一人に柳川宗成⁽⁶⁾（一九一四―一九八五年）がいる。柳川は中野学校（当時の名称は後方勤務要員養成所）二期生で、戦後、ジャワ島上陸から終戦までの体験をまとめた短い手記を発表し、さらにそれに大幅な肉付けを

した回想録『陸軍諜報員柳川中尉』を著して知られるようになった。⁽⁷⁾ また彼の死後、研究者によって編纂された柳川の遺稿集も出版されている。⁽⁸⁾ 柳川中尉（のち大尉）が別班の中心人物として精力的に活動し、とくにタンゲラン青年道場、ジャワ防衛義勇軍（PETA: Tentara Sukarela Pembela Tanah Air）の設立と育成に深くかわったことは先行研究がすでに言及している。⁽⁹⁾ そのほかに、二〇〇一（平成一三）年に公開された東宝映画「ムルデカ一七八〇五」（藤由紀夫監督）において俳優・山田純大が演じる主人公の「島崎武夫中尉」は、事実と異なる面もあるが（柳川は映画と異なりインドネシア独立戦争に参加せず、収監、釈放を経て帰国）、終戦直後までのその言動は柳川中尉をモデルとしており、⁽¹⁰⁾ 柳川の考え方や生き方を広く日本社会に知らしめることになった。

柳川など日本軍将校・下士官が幹部育成、訓練を行ったジャワ防衛義勇軍（PETA）は三期にわたって計六六大団が編制され、最終的に約三万三〇〇〇人の義勇兵、およびそれに加えて諜報専門の将校も養成されたが、⁽¹¹⁾ ある海外の研究者はそれについて次のように指摘する。「インドネシア人が軍事訓練を受けたことの意義はきわめて重要なものであった。これが、のちのインドネシア革命軍の大部分の将校と何千名もの兵士となり、復帰してきたオランダ勢力と戦う際の基礎となった。日本によって与えられたこのような機会がなかったならば、戦後のインドネシア民族革命の経過は違ったものになっていたであろう。」⁽¹²⁾

またあるインドネシアの研究者によると、ジャワ防衛義勇軍のインドネシア人将校たちは、戦後に誕生するインドネシア国軍、とくにその陸軍において重要な地位を占めることになった。たとえばインドネシア陸軍の歴代参謀本部長または司令官は、初代司令官スディルマン大将（Sudirman）をはじめとして八名中五人がPETA出身者である。また一九八一（昭和五六）年の時点で、同国の防衛安全機構の序列第一位である国防大臣・国軍司令官を兼任するスハルト大統領（Suharto）、ならびに第三位、第六位にそれぞれ相当する中將は元PETA将校であった。⁽¹³⁾

このようにインドネシア革命軍、インドネシア国軍に大きな影響を与えたジャワ防衛義勇軍幹部を育成した中心人物の一人が柳川であった。現代の日本では彼について高い評価が下されており、その顕著な一例として以下のような文章がある。⁽¹⁴⁾

- ① 太平洋戦争中、ジャワ占領軍の中に柳川大尉がいなければ、インドネシア独立の道はかなり違ったものになっていただろう。
- ② 日本はジャワ占領中、青年団、官吏養成学校など広汎な教育を行ったが、歴史に与えた意味の大きさという意味では、ジャワ防衛義勇軍の教育・編成が第一に数えられる。
- ③ その最初のアイデアは、当時の若い一中尉柳川に発し、義勇軍編成に先立って、当時の第一六軍参謀部は柳川中尉に「タンゲラン青年道場」の教育を任せた。
- ④ つづいて柳川中尉はボゴールにおいて義勇軍幹部錬成隊の中隊長をつとめるが、「死ぬまでやれ」という彼の教えは、やがて日本の敗戦、そして英蘭の再侵入に対するインドネシアの独立戦争にあたって生きた。
- ⑤ 柳川は厳しい教官ではあったが、教え子に対する深い愛情は彼らによく理解されたし、慕われたようである。戦後、柳川は一家をあげてジャカルタに移るが、家などの面倒を見たのは、かつての教え子であったと聞いている。将軍、大臣などに出世した彼らが、ニワトリやウイスキーなどをぶらさげて、「教官どの！」と彼の家に訪ねてくる風景がしばしば見られたという。

このように柳川は高く位置づけられており、彼の母校である拓殖大学もその実績を誇りとして彼をくり返し顕彰している⁽¹⁵⁾。もちろんジャワ防衛義勇軍は柳川だけによって作られたのではなく、指導官であった多くの日本人将校、下士官とその教育に応えたインドネシア人幹部（大団長、中団長、小団長）との相互作用によって築かれたものである。しかし柳川がその中でキーパーソンとして活躍したことは間違いないであろう。

本稿はこの柳川に焦点をあて、彼を軸に据えて陸軍中野学校出身者のジャワ工作の実態を検証するものである。その際、主な資料として用いるのは、拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室に所蔵されている柳川の自筆原稿である。これは四〇〇字詰め原稿用紙一〇八八枚から成り、大部のためアーカイブズ事業室では二冊に分けてファイルに綴じ、それぞれ背表紙に「専門部十期 柳川宗成大尉『ジャワ防衛義勇軍』遺稿」No.1、No.2のタイトルを付している。原稿の巻末に一九六六（昭和四二）年一〇月二六日に脱稿したことが示されており、したがってすでに六〇年近い歳月を経ているものの保存状態は比較的良好で、判読の困難な箇所はごくわずかである。ただしペー지가脱落しているところが三ヶ所あり、そこだけ前後の文章が⁽¹⁷⁾つながらない。

ここでなぜその原稿が拓殖大学に保管されているのか、由来を説明しておきたい。それは拓殖大学創立百年史編集室（現・拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室）で非常勤嘱託、専門員を務め、学内の刊行物に健筆をふるってこられた宮澤正幸氏（拓殖大学卒業生、元日刊スポーツ新聞記者）が柳川本人から託され、拓大に寄贈したものである。宮澤氏は日刊スポーツ新聞社時代、大学の先輩にあたる柳川の信頼を受けて原稿を預かった。そしてこれら約四二・八パーセントの分量にまで圧縮、編集した上で、一九六七（昭和四二）年一月二五日に『陸軍諜報員柳川中尉』としてサンケイ新聞出版局から刊行した。『陸軍諜報員柳川中尉』の著者が柳川であることは間違いないが、読者が読みやすいように宮澤氏が文章の再構成を行ったわけである。⁽¹⁸⁾要するに、拓大に所蔵されている

のは同書の元原稿ということである。

以下、この元原稿を便宜上「遺稿」と呼ぶことにする。『陸軍諜報員柳川中尉』は遺稿を半分以下に短縮したものであるといっても、ストーリー自体はほぼ同じで、柳川の活動の要所を押さえており、本人の文意、文体もほとんど損なわれていない。したがって十分に信頼のおけるものである。ただし当時まだ存命中であった関係者のことを配慮して、あえて伏されている所がある。またインテリジェンスの観点からいうと、残念ながら見落とされて削除されてしまった部分も散見される。そのほかに柳川が原稿用紙に書き込んだ地図なども書籍の方には収録されていない。ここで遺稿と『陸軍諜報員柳川中尉』の目次を対照したものを表1として掲げておく。これを見れば、両者の共通点と違いが大まかにつかめるであろう。一方にあり他方ない章はゴシック体で示している。

「同表からわかるように、『陸軍諜報員柳川中尉』では四つの章が落とされている。また遺稿巻末のB「工作図表」は同書でやはり省略されているが、情報戦、秘密戦を考える上では見逃すことができないものであり、その中で柳川は自らが所属した特務機関、すなわちバンドンの第二師団参謀部分室（略称・勇分室、「勇」は第二師団の通称号（秘匿名）である「勇兵团」の意）、ならびに第一六軍参謀部別班が行った工作として以下をあげている。⁽¹⁹⁾

★印は柳川自身が直接関係をもたなかったとしているもので、見やすさを考慮して本稿筆者が付け加えた。

- ① 治安工作
- ② インド義勇軍ジャワ支部工作
- ③ 回教工作、および対外謀略放送、同□□□（判読不能）工作
- ④ インドネシア特殊要員養成工作（通称・タンゲラン青年道場）

表 1 柳川遺稿／著書 目次対照表

遺稿	『陸軍諜報員柳川中尉』
1 ジャワ上陸第 1 歩—セラムの戦斗— (1)	1 ジャワ敵前上陸 (5)
2 変装潜行—「ルビリアンよりボゴール」へ— (59)	2 ボゴールへ潜行 (21)
3 バンドンへの道—「ボゴールからバンドンへ」— (129)	3 バンドン—番乗り (41)
4 勇分室活躍す (187)	4 勇分室の大活躍 (63)
5 勇分室から別班へ—「バンドン」から「ジャカルタ」へ— (247)	〃
6 女子刑務所跡 (285)	5 タンゲラン青年道場 (83)
7 ジャワの陸軍中野学校開設 (タンゲラン青年道場) (327)	〃
8 セタン往来 ²⁰⁾ (361)	
9 タンゲラン青年道場—インドネシア青年の斗魂— (415)	〃
10 対濠州諜報映画工作—濠州への呼び声— (445)	6 「濠州への呼び声」 (99)
11 ジャワ郷土防衛義勇軍建軍工作 (469)	7 防衛義勇軍の創設 (109)
12 幹部教育隊発足—東京から又ジャワへ— (541)	8 幹部教育隊発足 (137)
13 ボゴール風物詩 ²¹⁾ (589)	
14 中隊長の死 (中隊長候補者の死) ²²⁾ (619)	
15 斬られた小指 (645)	9 * 参謀長斬るべし。 (149)
16 イ号勤務隊—インドネシア特設遊撃隊— (691)	10 特設遊撃隊を編成 (161)
17 回教青年挺身隊—“HiSBuLLAH” (ヒズブルラ) — (729)	11 回教青年挺身隊 (169)
18 ブリタール事件前後 (775)	12 ブリタール事件 (175)
19 終戦前後 (スカルノとの密談) (803)	13 終戦前後 (187)
20 部隊集結から「スカブミ」へ (871)	14 キャンプ集結 (213)
21 動乱の中をバンドンに潜入 脱出 其して自首 (927)	15 自首 (229)
22 承命長恨 (971)	16 獄中記 (243)
23 ジャカルタ雑記 ²³⁾ (1023)	
	柳川あとがき (255)
	編集部あとがき (256)
A 終戦時の柳川部隊名簿 (1067)	終戦時の柳川部隊名簿 (257)
B 工作図表 (1072)	
C 記憶に残る義勇軍指導に活躍した人々 (1074)	義勇軍指導に活躍した人々 (259)
D 義勇軍出身者の活躍 (1078)	タンゲラン青年道場以外の義勇軍出身者の活躍 (261)
E 私の記憶に残るタンゲラン青年道場出身者の名簿 (1086)	タンゲラン青年道場出身者とその後 (260)

() 内の数字は開始ページ番号

- ⑤ ボゴール義勇軍幹部錬成隊工作（通称・第一次）
- ★⑥ バリ島義勇軍教育（土屋競大尉担当）
- ⑦ ボゴール義勇軍幹部教育隊（通称・第二次～第四次）
- ⑧ 義勇軍指導部（後に別個の工作单位となる）
- ⑨ 対濠州諜報謀略工作
- ★(イ) 浪機関 海上諜報防諜工作
- (ロ) 対豪州謀略映画製作
- ⑩ ジャワ防衛義勇軍特設遊撃隊工作（通称・イ号勤務隊）
- ⑪ 口号～ハ号工作（浪機関の後身といふべきもので、華僑を主体とした工作）

このうち⑨（イ）の浪機関については柳川自身が直接関与しなかったとしているだけに、遺稿においてもそれについての目立った言及はほとんどない。しかしながら以上を見ると、柳川は勇分室、別班が行った主な工作の大半に関わっていることになる。本人の自己アピールということで割り引いて見なければならぬ点もあるだろうが、実際ジャワにおいて柳川ほど多岐にわたって活発に情報・工作活動に携わった人物は珍しく、やはり同地の陸軍インテリジェンスを代表する人物の一人として着目する必要がある。

柳川については『陸軍諜報員柳川中尉』が公刊されたこともあって、日本インドネシア関係史やインテリジェンス研究者の間では早くから知られており、事典においても彼の項目が設けられているほどである。²⁴また研究者によって柳川の生涯を要約した論稿も公にされている。²⁵ただしこれまで世に出た柳川に関する記述は、『陸軍諜報員柳川中尉』を参照した上での紹介にとどまる場合が多く、その情報・工作活動を学術的に考察したものは管

見の及ぶ限りでは見当たらない。

また陸軍中野学校の研究においては、中野出身の丸崎義男が戦前から在スラバヤ日本領事館で情報収集にあたっていたこと、将校の米村政雄、星野鉄一、吉武智嘉男、下士官の片山康次郎、熊谷正男、夏井義男の六名がパレンバン降下作戦に参加したこと、太郎良定夫がサイゴンからジャワに向けて謀略放送による欺瞞作戦を行ったこと、第一六軍参謀部別班の中核であった中野出身者がジャワ防衛義勇軍の設立や数多の情報・工作活動に従事したことなどが述べられているが、その大半が先述の中野校友会編『陸軍中野学校』を下敷きとし、その記述をまとめたものであって、柳川については考察していない。⁽²⁶⁾

本稿ではこれまで研究者によって用いられることのなかった柳川の遺稿を手がかりとして、中野学校出身者のジャワ工作の一端を柳川に焦点をあてながら検証し、これまでのインテリジェンス史、中野学校史研究で取り上げられることのなかった面を明らかにしてみたい。とくに柳川は他の人々の目に触れにくい密室的な環境の中で敵国の捕虜に脅迫、拷問を行い、成果をもたらしたが、この表側に現れにくい隠れた行動を「影の局面」としてクローズアップする。

一 戦場に出るまでの教育 (I) —— 拓殖大学

柳川宗成は一九一四(大正三)年七月六日、徳島市佐那河内で誕生した。その後、大分県別府市で歯科医院を開業していた長兄の下で幼少時代を過ごし、大分県立杵築中学を卒業する。さらに一九三四(昭和九)年四月、拓殖大学専門部商科南洋語組に入学し、日中戦争勃発前の一九三七年三月に専門部一〇期生として卒業した。⁽²⁷⁾

ここで若き柳川を育んだ拓殖大学について見ておきたい。拓殖大学はもともと一九〇〇(明治三三)年、台湾

協会学校の名称で創設され、主に台湾開発のための人材を育成することからスタートした。「拓殖」（未開の荒地を切り開いてそこに住みつく）の名が示すように、多数の卒業生が台湾、ひいては朝鮮、満洲での活躍をめざした。今日でも拓大では、①人種の色と地の境に差別はなく、②海外に雄飛して、③現地の発展に貢献し、その地の塩となることが建学の精神として受け継がれている。

日清戦争後、日本の支配下に入った台湾は日本の南進の基地となった。台湾からさらに南を臨めば、東南アジア、南洋諸島が存在する。台湾に人材を送り込んだ拓大は、早くからそうした台湾の延長線上にある南方地域に目を向けていた。その象徴的な動きとして、同校（当時の名称は東洋協会専門学校）は一九〇七（明治四〇）年、日本の大学では初めてマレー語教育を導入している。一般には、拓大、東京外国語大学（東京外国語学校）、大阪外国語大学（大阪外国語学校）、天理大学（天理外国語学校）の四大学がインドネシア・マレーシア語教育の老舗といわれるが、東京外大がマレー語教育を開始したのは拓大の一年後の一九〇八年であり、大阪外大は一九二一年、天理大は一九二五年のことであって、拓大は他校に先駆けていた。²⁸

さらに一九二一（大正一〇）年、拓大のマレー語教育は一層本格化し、日本人とネイティブの二人教育体制がとられるようになった。一九三二（昭和六）年からは日本のインドネシア・マレーシア語教育の確立者の一人とされる宇治（のち藤本）武夫がマレー語教育を支え、一九四九（昭和二四）年まで教鞭をとっている。一九四一年の太平洋戦争開戦当初、日本におけるインドネシア人居住者は二〇人ほどであったが、そのうちの二名は拓大最初のインドネシア人語学教員であった。大東亜共栄圏の確立が謳われる中で日本のマレー語学習は隆盛を見せたが、拓大はその核の一つであったといえよう。²⁹

こうした学風と語学教育を反映して、昭和戦前から戦中期の南洋地域では相当数の拓大卒業生が活躍することになる。四期生の根本栄次はそうしたOBの先駆けで、日本企業と業務契約を結びながら中部ジャワでゴム園を

経営し、大農園主として成功した。そのかたわら東京丸の内に南洋商事株式会社を設立し、自ら社長として綿布の輸出や南洋産物の輸入を行っている。⁽³⁰⁾ そのほかにも、たとえば以下のような会社に卒業生が勤務していた。⁽³¹⁾

【ジャワ島】 ……南洋倉庫（ジャカルタ）、明治製糖（ジャカルタ、スラバヤ）、南洋海運（スラバヤ）、日本原皮（スラバヤ）、東京ゴム（バンドン）、東洋棉花、南洋フューム、日盛洋行、野村東印度殖産、平井商会

【スマトラ島】 ……大倉スマトラ農場、ジャワ日報社、昭和ゴム、日本棉花、三菱商事、大和商会

【セレベス（スラウエシ）島】 ……セレベス興業商会マンキット農園

このように拓殖大学の卒業生は、数ある進路の一つとしてインドネシアを含む南方地域を志向していた。そうした伝統がある中で、柳川はとくに南洋語（マレー語）の学習を志望して拓大に入学したのである。

戦時中のインドネシアで活動した拓大卒業生は柳川一人だけではない。柳川より五年早く拓大に入学した先輩の伊藤精一は、やはり南洋語を専攻し、在学中は大川周明の講義を聞いて蘭印文化やイスラームに関心をもった。卒業後は南洋興発株式会社に就職したが、太平洋戦争の勃発ともない予備将校として召集され、一九四三（昭和一八）年よりジャワの第一六軍参謀部別班で柳川とともに勤務している。⁽³²⁾

柳川の同期生（専門部一〇期、一九三七年卒業）である近藤富男は戦時中、スマトラ島北部のメダン近郊にあった弘報班インドネシア語組に所属し、戦後はスマトラ島北端のアチュに残留してインドネシア独立戦争を戦い、独立が達成された後に帰国している。⁽³³⁾ また柳川の後輩にあたる若林光也（通称・鬼行）⁽³⁴⁾ は予科一部南洋語科に在

学中の一九四二年、第一六軍参謀部宣伝班員としてジャワ島に上陸し、三亜運動に携わったのち別班に移り、臨時雇員として柳川の主宰するタンゲラン青年道場の運営を手伝った。⁽³⁴⁾

柳川の六期後輩の今石貞二郎（専門部一六期、一九四二年卒業）は戦時中に南洋語科を卒業後、久留米第一陸軍予備士官学校を経て第一六軍参謀部別班に入った。今石見習士官はボゴールのジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊で柳川大尉等からインドネシア人を教育するための事前教育、「中野学校のような訓練」を受けた上でバリ防衛義勇軍幹部教育隊の第二区隊長となり、最終的にバリ防衛義勇軍第三大団の将校指導官として少尉で終戦を迎えている。⁽³⁵⁾

以上のように拓殖大学は早くからマレー語教育を重視し、インドネシアなど南方地域で活躍する人材を育成してきた。若き柳川もそのような土壌の中で育まれたのであって、戦時中は柳川と同じようにインドネシアで特殊任務についた者が少なくなかったことに注意しておきたい。⁽³⁶⁾

戦時中、ジャワにおける柳川は旺盛な活動力とその気迫において、陸軍幼年学校・士官学校出身の生え抜きの将校以上に軍人らしい人物であった。しかしながら彼が拓殖大学に在籍した一九三四（昭和九）年四月から一九三七（昭和一二）年三月という時期は大きな戦争もなく、軍隊に入っていない若者ばかりの間の平和を満喫していた。拓大も「まだおらかな時代」で、卒業生の就職も比較的良好であった。⁽³⁷⁾ その一方で「拓殖大学学生心得」は次の七つの教訓を服膺すべしと明記している。⁽³⁸⁾

- (1) 忠君愛国ノ精神ハ本大学ノ生命ナリ
- (2) 国家観念ニ基ツキテ身ヲ立テ道ヲ行フヘシ
- (3) 大国民ノ態度品位ヲ理想トスヘシ

- (4) 智徳ノ研修ハ真剣ニナスヘシ
- (5) 誠意忠実ニ職責ヲ重ンスヘシ
- (6) 服従ヲ守リ規律節制ヲ重ンスヘシ
- (7) 身体ヲ鍛錬スヘシ

この「拓殖大学学生心得」冒頭の(1)(2)にあるように、拓大は忠君愛国の精神を大学の生命とし、国家観念にもとづいた人生を歩むよう学生に促していた。拓大を選んだことからいって柳川も愛国心が強かったであろうと推察されるが、在学中の彼は忠君愛国に凝り固まった融通のきかない人物ではなかった。むしろ「学生共済組合委員や、カメラ部で活動する明るくダンディな青年だった」という。後述するように、やがてジャワでインドネシア青年の軍事教育、訓練に従事することになる柳川は、教え子たちに東方遥拝（東京にある皇居に向けての最敬礼）を行わせるときは天皇そのものを拝ませるのではなく、イスラームの絶対神に天皇の長寿と繁栄を祈願するという形にアレンジした。そうした柔軟性は、彼が一般の大学で青春を謳歌したことも関係しているのではないかと考えられる。

他方、拓大は現在も継承されている次のような校歌をもち、学生はそれを愛唱した。⁽⁴⁰⁾

- 一、めて右手に文化の炬をか、ひげ
闇は消えよと呼ぶは誰ぞ
 鳴呼輝ける雄渾の
 扶桑の岸に声あげて
 人は醒めよと呼ぶは誰ぞ
- 二、雲は焰の色に飛ぶ
 姿ぞ我の精神なる
 南国水はたぎるとも

春光永久^{とわ}にへだてたる

仰いで星を見るところ

三、人種の色と地の境

膏雨^{こうう}〔恵みの雨〕ひとしく湿^{うる}さは

使命^{たか}は崇^{たか}し青年の

北地に氷とぎすとも

拓^{ひら}かでやまじ我が行手

我がたつ前に差別なし

境^{こうかく}埒〔やせた土地〕やがて花咲かむ

力あふる、海の外

右のゴシック体の部分をたどるならば、南国の水が煮えたぎろうと、我々はその土地を拓かないではやまない。人種の色や国境に違いがあつても関係はない。恵みの雨で潤せば、やせた土地にもやがて花が咲くのだ。海外で力をみなぎらせる青年の使命は崇高なのだ、ということになる。このように校歌自体が、柳川をはじめとする在學生に、南方（または北方）の土地を切り開き、そこを豊かにしようという理想を掲げ、それを奨励していた。

次に柳川が受けた語学教育について述べておきたい。彼が入学した当時、拓大専門部には拓殖科、法律科、商科の三つがあり、柳川は商科の南洋語組（マレー語）に入学した。もともと語学科目としては英語、第二外国語（支那語、露語、南洋語、南米語のうち一つを選択）があり、これら語学の授業の試験は会話、文法、和訳、作文を各一〇〇点として採点するとされ、会話も取り入れられていたことがわかる。⁽⁴¹⁾

ジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊で柳川に接した先述の今石貞二郎によると、ジャワでの柳川はインドネシア語が多少話せたようである。今石自身もインドネシア人の話す言葉の「半分ならわかる」、「当時のインドネシア語は、単語を並べるくらいやからね。だから、簡単や。動詞や形容詞はあまり使わんでもわかるけん」という状況であった。⁽⁴²⁾しかし実際の訓練では柳川も今石も通訳を用いており、後述するように柳川は情報収集の際、軍属の通訳・富樫武臣を重用し、彼と一心同体となって活動していた。したがって拓大で南洋語を学んだとはいえ、それには限界があり、高度の会話まではできなかつたことがわかる。

つづいて拓大専門部の専門科目であるが、全体として経済、商業、植民に関する学業に重点を置いていた。具体的には、経済原論・経済地理・国際経済・海外経済事情といった経済系、簿記・会计学・商業数学・商業通論・商業各論・関税及商品学・貿易実務・商工経営などの商業系、そして移殖民史・移殖民地政治外交史・移殖民法制・移殖民政策といった拓大の学統に合った植民系、すなわち大別して三系統の履修科目が用意されていた。⁽⁴³⁾ 柳川は海外雄飛を促す校風の中で、こうした授業を通じて実務的な知識を得ていったわけである。逆にいえば、通常の学部と異なる専門部であるだけに教養系の科目は修身、論理心理といったものがある程度で、哲学、文学や広い意味での歴史(日本史、東洋史、西洋史)などのリベラルアーツを学ぶ機会はほとんどなかった。

二 戦場に出るまでの教育(Ⅱ) —— 中野学校

一九三七(昭和一二)年三月、拓大を卒業した柳川は徴兵検査を受け、翌三八年一月に陸軍の飛行第四連隊(福岡県大刀洗)に入営した。ちょうど日中戦争が始まり、日本が平時から戦時に突入したばかりのころであった。以後、彼の経歴は表2に記した通りである。

以上の軍歴の初めのあたりを見れば明らかなように、柳川の兵科は航空であった。陸軍が航空兵力の拡充を進めていた当時、柳川はまず飛行連隊で通信手としての技能を学んだ上で、水戸陸軍飛行学校で甲種幹部候補生としての教育を受けている。航空といっても、ジャワでの彼は普段からメガネをかけていたから視力は弱く、パイロット(操縦)になるのは最初から無理であった。入営間もないころは航空通信、ついで幹部候補生になってからはとくに地上勤務の要員として訓練を積んでいったものと考えられ、東京陸軍航空学校の教育隊では区隊長として一五〜一七歳の少年航空兵の指導を経験している。

表2 柳川の軍歴

年	月 日	経 歴
1938 (昭和13) 年	1月10日 5月1日 6日 14日 6月1日 7月1日 15日 20日 9月1日 12月1日	現役兵として飛行第4連隊〔福岡県大刀洗〕に入隊、航空二等兵 幹部候補生、航空一等兵 通信手修業 下志津陸軍飛行学校に分遣入校 航空上等兵 水戸陸軍飛行学校に転校 同校教育隊第1中隊に編入 甲種幹部候補生 伍長 軍曹
1939 (昭和14) 年	5月27日 6月1日 11月30日 12月1日	〔水戸陸軍飛行学校における〕教育終了、航空総監部附 東京陸軍航空学校に分遣、第1中隊第1区隊長 曹長、見習士官 現役満期 予備役編入、引き続き召集 少尉、陸軍省防衛課、同日、 陸軍中野学校に入校
1940 (昭和15) 年	10月26日	陸軍中野学校を卒業 、現役編入 陸軍省及び補大本営陸軍部附
1941 (昭和16) 年	8月1日 11月1日	中尉 南方総軍兼務
1942 (昭和17) 年	1月4日 3月1日 9月1日	大阪港出発 ジャワ島上陸、第2師団へ派遣 第16軍参謀部に復帰
1943 (昭和18) 年	1月1日 6月7日 10月25日 12月1日 12月10日	インドネシア特殊要員養成隊長 (青年道場長) 第16軍参謀部別班に復帰 ジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊第3中隊長 大尉 錬成隊教育終了
1944 (昭和19) 年	1月1日 12月25日	ジャワ防衛義勇軍幹部教育隊長 ジャワ防衛義勇軍特殊遊撃隊長 (イ号勤務隊長)
1945 (昭和20) 年	3月1日 6月1日 6月15日 8月15日 12月6日	ジャワ回教青年挺身隊教育隊長兼任 右教育終了 第16軍特別攻撃隊長 (ロハ決死隊) 終戦、特殊業務員全島より集結し、柳川隊とし終戦処理 連合軍により収監
1947 (昭和22) 年	5月10日	復員 佐世保港

出典：「加算関係履歴申立書」(複写)、拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室所蔵。戦後、旧軍人恩給加算のため柳川が自筆で記入作成した履歴申立書のコピーである。

しかしながら柳川は秘密戦勤務に適任であると認められ、一九三九(昭和一四)年一二月、少尉任官とともに陸軍中野学校(当時は後方勤務要員養成所)に入学した。後方勤務要員養成所はその前年にスタートして一期生一八名を卒業させたばかりであり、柳川は二期生であった。正確にいうと二期生は、予備士官学校卒業生の乙Ⅰ長(当時の名称は第二期乙種長期学生、最終的に四〇名が卒業)、乙Ⅰ短(第一期乙種学生、六七名卒業)、および下士官候補者出身の丙Ⅰ(第一期丙種学生、四九名卒業)の三種類に分かれ、それぞれがお互いに顔を合わせることなく別々に教育が行われた。柳川は乙Ⅰ長学生であり、クラスメートはまだ約四〇名程度の少人数の時代であった。⁽⁴⁴⁾学生は北方班、南方班、支那班に分類されて教育を受けた。⁽⁴⁵⁾柳川は大学での学業からいって南方班に所属したと考えられる。

以下、中野学校時代の柳川について見ていきたい。第一に入校時の場面である。一九三九年一二月一日、柳川ら乙Ⅰ長の学生、および乙Ⅰ短の学生は午前八時から九時の間に制服着用で陸軍省に集合させられた。後方勤務要員養成所の当局はまだその運営に慣れていなかったせい、集合時間がちよつと陸軍省職員の出勤時間と重なったため、集まった学生たちは裏門から入って来る多数の職員に「奇異ノ感」を与え、早くも保秘上の問題を呈することになった。九時から九時四〇分まで柳川ら乙Ⅰ長学生は医務室で身体検査を受けた。さらにその後一時から省内第一会議室で入所式が行われ、陸軍大臣・畑俊六大将、参謀次長・沢田茂中将、後方勤務要員養成所長・秋草俊大佐から訓示があった。入所式は三〇分で終わり、一行は一一時半に陸軍省を出発し、一二時一〇分に後方勤務要員養成所に到着して、全員の入所を完了した。⁽⁴⁶⁾

柳川の目から見たこの日は以下のようなものであった。⁽⁴⁷⁾まず入所式で柳川ら学生は、「諸官は選ばれた秘密戦々士として滅死奉公、皇国発展の捨石となれ」と訓示された。陸軍大臣、参謀総長の宮ほか各将官が並みいる中で、「物々しい空気に気おされて眼をすえている」間に、バスで直接中野学校に運ばれたという。柳川は参謀

総長・閑院宮載仁親王が列席したとしているが、これは沢田茂参謀次長の記憶違いである。

学校に着いてからの柳川の説明はわかりづらく、構内の状況、建物の配置がうまく把握し難いのであるが、とりあえず彼の描写にしたがってみる。門を入り、左に二階建ての兵舎を見ながら再び門を入り、宿舎に案内された。宿舎は講堂、特殊諜報防護参考室、写真用暗室、語学別教室、図書庫、図書室、食堂、浴室、便所、小使室が一連の棟になっていた。宿舎を入った左側が広間で食堂、集会所であった。右に曲がると長い廊下を通じていて、右側に宿舎がある。一階上がったところが研究室兼教室になっていた。突き当たって左側が先ほどの二階建ての兵舎に通じるようになっており、右に行くと語学教室、図書室であった。その前に中庭を経て本部があり、宿舎と本部の間に武道場が建設中であった。

以上から正確なイメージを作るのは難しいが、当時の構内には居住スペースや教室以外に「特殊諜報防護参考室」や「写真用暗室」がすでに設けられていたという点がスパイ学校らしく興味深い。

また学校本部の前には柳川ら学生専用の通用門があった。高い囲いの外側に二階建ての民家があったが、学校内を見下ろせる窓はすべてつぶされていた。そのほかに一区画区切られたところに、乙I短、丙I学生が教育を受ける元兵舎風の真新しい二階建てがあった。当時の柳川たちはお互いの存在を知らず、連絡し合うこともまったくなかったという。

宿舎に入って各室入口に書かれた名前を見ると、そこには「柳川」という名はなく、「柳井」とあった。最初は間違って書かれたのかと思つたが、わざわざ偽名で書いているのかもしれないと思い、黙って柳井と書かれた部屋に入った。すると手箱にも「柳井」と書かれてあった。木製の寝台に手荷物を置いて同室の人々の顔を見ると、一様に不審な顔をし、まったく面食らっていたが、一回われこそはといった秀才顔をしていた。柳川自身も面食らっていたが、質問するのも業腹だから黙って待っていると、隣室から始められた点呼でやはり「柳井」

と呼ばれた。名前は勝手に作れと言われ、簡単なものが何よりと考えて「守」とつけた。その後約一年間、そこでは「柳井守」と呼ばれて通した。そのような状態であったため、とくに任地・任務の関係でお互いに連絡があった者は別として、中国、満洲、ソ連要員となった人々の大部分は偽名のまま彼の記憶にとどまることになり、戦後もお互いの本名を知らないでいる場合が多かったという。

遺稿によると、同級生の大体が大学、高等専門学校卒業の「インテリ」で、中には高等文官試験合格の官吏、医師、歯科医、獣医、その他技術者がいたとある。学生隊長（学生主任）は伊藤佐又少佐、学生係は一期生の丸崎義男中尉で、二人とも背広を着て、頭髪を七・三に分けていた。

しかしこの伊藤少佐と丸崎中尉は、柳川が入校して約一ヶ月後の一九四〇（昭和一五）年一月、神戸事件（在神戸イギリス総領事館襲撃未遂事件）を起こし、学校当局に打撃を与えることになる。伊藤少佐は逮捕拘禁され、軍法会議の結果、不起訴処分の上、予備役編入となった。一方、事件に加わった丸崎中尉ら一期生三名、および柳川と同期の二期生四名の処分はまったく行われなかった。しかし事件発生から三ヶ月後、秋草俊所長が責任をとって辞任し、以後、中野学校Ⅱ「秋草学校」の自由な雰囲気⁽⁴⁸⁾が失われていくことになる。柳川が秋草所長の下で学んだのは約四ヶ月程度であった。なお不問に付された丸崎中尉は在スラバヤ日本領事館勤務を経て、開戦後は第一六軍参謀部別班長となり柳川の直接の上司となる。

少尉に任官して営外居住ができると内心得意になっていた柳川は、彼なりに楽しい夢、待望の個人的プランをもっていた。そこで郷里から必要な荷物と布団など身の回りの品を陸軍省防衛課気付で送ってもらっていた。ところがこの夢は立ちどころに消え、営外居住などもってのほかで、布団などは即日送り返されたという。乙長学生の大半は日用品、私服を入れた将校行李一つだけを携えて入校し、その翌日から私服を着用できたが、寝具を持って来た者が数名いたため、学校側はその一部を返送させ、残りを校内の倉庫に保管するといった余分な手

間を取ることになり、この点は学校の改善課題となった。⁽⁴⁹⁾ 柳川はそうした問題を起こした一人であり、この時点ではまだ秘密戦士としての自覚はなく、比較的のんびりしていたことがうかがえる。

以上、第一として中野学校入校時の場面を追って来たが、つづいて第二に同校での学生生活を見てみよう。先行研究によると、柳川ら乙工長学生は乙工短学生と異なり、当初は二年間かけて諜報をじっくりと学び、卒業後は海外に長期居住してインテリジェンス活動を行うことが使命とされ、また日本軍支配地で宣撫、行政活動を行う任務も課せられていた。したがって幅広い教養を要求されたが、戦局の逼迫と経費の節減により教育期間が乙工短学生と同じ一年間に半減され、しかも授業科目は減らなかったため、日曜・祝祭日返上で夜間も授業が行われることになった。⁽⁵⁰⁾ そのため学生生活はきわめて忙しいものとなったが、そうした中で特殊勤務に合った柔軟な外見と人間性を養う必要があった。

以下、柳川の回想である。外出は皆無で、まったくの缶詰状態であった。軍服を着用することはごくまれで、特定の部隊において実習、演習を行う際にのみ着用を許されたが、そうした機会もごくわずかであった。軍服を着る場合には許可願の提出が必要で、それが認められて初めて許された。私服での出入りは、軍服の際とはまったく反対側の通信研究所と書かれた表札のある桜並木の門から行うことになっていた。

頭髮はのばせと言われたので長髪であり、黒色サージの背広上下が制服として支給された。また食堂でレコードをかけ、ダンスの講習会も開かれた。当時としてはこの一事だけでも別天地の感があったと柳川はいう。「並木の道に雨が降る」というブルースがよくかけられたというが、これは一九三四（昭和九）年に流行したミス・コロムビア（松原操）が歌う「並木の道」のことで、恋人の帰り来る日を思う甘く切ない曲であり、歌詞も旋律もおよそ軍隊の学校に似つかわしくないものであった。

第三に、柳川が受けた教育内容についてさらに踏み込んでみたい。中野学校のカリキュラムが用意した科目は

表 3 1938 年度 後方勤務要員養成所第 1 期生の教育予定実施表・見学予定実施表

① 学科	軍事学	戦争学、外国事情及兵要地誌（英・米・独・仏伊・蘇・蘇（兵要地誌）・支那・支那（兵要地誌）・南洋・蒙古）、外国兵器、外国築城、情報勤務、謀略勤務、宣伝勤務、防諜勤務
	政治学	国体学
	経済及社会学	経済謀略、経済政策、思想労働問題
	外国語学	蘇語、英語、支那語
② 術科	武術	剣術、柔術
	実務	防諜補助手段、防諜技術、暗号、写真技術
③ 科外	特別講座	服務〔秋草所長担当〕、気象学、交通学、航空学、細菌学、薬物学、細菌戦、海軍々事学、無線電信機取扱法 拡声器取扱法、心理学、統計学、犯罪手口
	実習	自動車実習、通信実習、航空実習、爆破実習、講堂実習、現地実習（水泳演習）、 現地実習（満洲旅行）
	講話	忍術、法医学、講話〔兵務局長、兵務課長、佐官級将校 10 名（土耳其事情、軍ノ会計經理ニ就テ、思想謀略、支那人ノ国民性ト秘密結社ニ就テなど）、山田耕筰〕
④ 自習（課題作業）、其他（座談等）		
⑤ 見学	皇居	賢所参拝〔紀元節〕
	神社仏閣	回向院〔両国回向院ではなく、吉田松陰が葬られた南千住回向院か〕、明治神宮・乃木神社・青山墓地、明治神宮宝物殿、靖国神社、松陰神社
	博物館	遊就館、海軍館、通信博物館、科学博物館、帝室博物館、鉄道博物館
	美術館	明治神宮外苑絵画館〔聖徳記念絵画館〕、伊太利展覧会〔ファシスト伊太利展覧会、於上野公園東京府美術館〕
	マスメディア	東京日日新聞社、東京放送局、東宝撮影所
	軍事施設	東京湾要塞、横須賀海軍、陸軍気象部、陸軍造兵廠東京工廠
	研究施設	科学研究所〔陸軍科学研究所か〕
	その他	衆議院議場、横浜税関、無線電信所〔陸軍または海軍の施設か〕、東日会館プラネタリウム

出典：以下をもとに作成した。前掲、山本『陸軍中野学校』98-99 頁。山本武利「陸軍中野学校重要公文書」『Intelligence』第 17 号、2017 年 3 月、99-103 頁。原文書は、後方勤務要員養成所「後方勤務要員養成所乙種長期第一期学生教育報告」、1939 年 7 月所収、JACAR：C01004653900 密大日記 第 9 冊 昭和 14 年（防衛省防衛研究所）。

表3に示したようなものであった。これは一期生のものであるが、柳川ら二期生の場合も大きな変化はなかったと考えられる。柳川と関連してとくに重要な個所はゴシック体で表記した。

このうちまず講義科目について、柳川は次のように記している。教官は心理学、術科の変装変様、空手を除いて、すべて参謀本部および陸軍省の課長、各部長であり、現職の各部課の担当主任参謀、課員、すなわち第一線の要職にある人々が、入れ代り立ち替り、各自各様の立場と見解で、「活きたなまの情勢」を解説した。彼らは学生にその推察なり判断の資料を提出するとともに、適時適切な課題を出して作業させた。「各教官は彼の経験と立場上の生まなましい資料と解説で強力に勝手な熟を我々に吹き込んで行った。此れが当時何も知らない我々を段々と開眼させた。此れが良かったと思っている。此れが生きた教育として我々に段々と活気と生気を感じさせて来た」という。

さらに柳川は次のように振り返る。後に中野学校は学校としての形態を整えて来るにしたがって教材教程の整備は段々と完璧になって来たが、「新しい情勢の推移に即応した教育の生氣」は段々と薄らいだように思われる。そのころはとくに国体問題がやかましく言われたが、この国体問題についても徹底した討議がなされた。当時の状勢下でここほどかように自由に発言し、討議し、研究できたところは他には無かったと我々同期の大方が感じているというのである。

このように柳川は活気に満ち、自由な雰囲気のある初期の中野学校で新しい世界を開いていった。そうした中でとくに柳川の心に刻まれたのは「誠」の重要性であったという。中野学校では精神教育を重視し、「誠の精神」がその柱となっていたが、柳川もその影響を受けていた。彼は次のように記している。

別して私の心根に残されたのは謀報、謀略にしろ、誠の無いものは何時かは剥けて行き、反動が別の火の粉とし

て我が身に降りかかると云ふ数多の史実であった。

諜報、謀略には「誠の精神」がなければならぬというのである。そうした考え方は柳川以外にも見られるもので、二期後輩（三丙）のある人物は次のように述べている。

中野学校の精神は一口に云えば「誠」であるといわれる。……謀略、諜報という所謂秘密戦は、一見極めて悪辣、非道な方法が要求され、暗い印象があるが、それは一つの方法論であつて、その根底には必ず「誠」がなくてはならぬと教えられた。⁽⁵²⁾

この卒業生はつづけて、日露戦争時における明石元二郎大佐の政治謀略が成功したのも反皇帝派に赤心を吐露したからであったという。誠実であればこそ工作対象を動かすことができたというわけであるが、中野学校では明石工作などを例にとりながら誠心の必要性を教示したのであろう。柳川もそうした中野学校の学風を受容した一人であった。⁽⁵³⁾ 彼は戦後になつても「誠」を座右の銘としたが、それは中野学校時代に得た確信から生まれたものであった。

このように通常の学校と異なる独特の教育を施される中で、柳川の意識は着実に変わっていった。彼によると、「特異の環境が生む異質さと、教材、教官が醸し出した精神的要素は、中野特有と言われる選民意識というか、特権意識というか、一種独特の中野イズムに段々と生れ変つてゆくのが判つた」⁽⁵⁴⁾。すべてが駆け足で叩き込まれ、特殊教育の技術など、たかが一ヶ年の課程ではまことに幼稚であり基礎的なものであった。しかしながら「我々の全く考へてもない未知の世界への誘導、即ち諜報、防諜、謀略、宣伝の実例を挙げての解説と術科、加ふるに我々の身近かにつつた某大使館・領事館襲撃計画（未遂）による周囲の空気は、我々を日一日とスパイ開眼へ

と追ひ込んで行った」という。

以上見てきたように柳川は、参謀本部や陸軍省の現役課員から生きた知識を学び、未知の世界に目覚め、意欲を増していった。それとともに「諜報謀略には誠の精神が必要である」ということを心に刻んだ。加えて歌謡曲に合わせてダンスの講習を受け、国体問題につき自由に討論するといったことも経験し、そういったもろもろの特殊な環境と教育を通じてインテリジェンス・オフィサー、秘密戦士としての使命感を身につけていったのである。

次に実技科目について、柳川は次のように記している。特殊術科は広く多岐にわたっており、たとえば変装変貌と称するものがあり、変装とは服装、体つきを変化変形させること、変貌とは顔、体の様相を変えていくことと教えられた。鏡を前にしてドーランを塗り、「スピリットガム」と称するものをつけて顔形を変え、入れ歯をし、つけひげをつける実習も行った。また暗号解読の基礎事項、暗号作成、秘密通信法、秘密インク、これの発見法、親書・外国公文書の開緘、写真撮影についてはチョッキのボタンに取り付けた腹巻式写真機、当時は秘密写真機といわれた超小型ライター写真機、手提げカバンに取り付けた九ミリ撮影機の取り扱いを学び、火薬、放火資材の製法、時限爆弾の作製、細菌戦における細菌の取り扱い等々、枚挙にいとまがないほどであった。細菌戦の教育に直接あたったのは石井四郎軍医大佐で、その実弟〔石井正か〕⁽⁵⁵⁾が中野学校で柳川の同期生であったという。

実習では自動車の運転、飛行機の操縦、鉄道、戦車、通信技術、爆破作業に加えて、乗馬、水泳、空手、銃剣術に至るまで、当時の陸軍の各分野におけるエキスパートが直接、特別教育を行った。甲賀流一〇何世（一四世）と称する藤田西湖の忍術講座が特設の教場で催されたこともあった。全体を通じて「間口も広く、奥行も深く」と要求されたが、在来の手段方法を素読させられたようなものであったという。

20	20 日	13:23	天津着	20～21 日 租界問題研究 北支ニ於ケル諜報、謀略研究
21	21 日	20:25 22:40	天津発 北京着	21～23 日 占領地行政ノ研究 通州事件ト通州機関ノ研究 占領地ノ通信機関 放送、宣伝業務見学
22	22 日			
23	23 日	23:30	北京発	
24	24 日	08:00	張家口着	24～26 日 対外蒙諜報、謀略業務実習 諜報要員養成所見学 占領地行政ノ研究
25	25 日			
26	26 日			
27	27 日	09:00 15:50	張家口発 北京着	
28	28 日	07:50 (急行)	北京発	
29	29 日	21:50 23:30	釜山着 釜山発	
30	30 日	07:15 08:50 (急行)	下関着 下関発	
31	10 月 1 日	06:55	東京着	

出典：「乙種長期学生滿蒙支実習演習予定計画」、「学生現地演習実施の件」JACAR : C01004855100 密大日記 第 12 冊 昭和 15 年（防衛省防衛研究所）所収。1940 年 7 月 8 日付・後方勤務要員養成所長 上田昌雄大佐より畑俊六陸相宛「学生現地演習実施ノ件申請」に添付されたもの。この表は前掲、山本『陸軍中野学校』117 頁にも掲載されているが、9 月 24 日以降分が切れて載っていないため、改めてここで紹介するものである。ちなみにこの実習演習には乙種長期学生〔乙 I 長〕だけでなく、乙種学生〔乙 I 短〕も参加している。乙 I 短の参加者名簿は上記文書に付けられているが、乙 I 長のそれは見当たらない。

そうした中で柳川にとりわけ大きな影響を与えたのは、中野学校の教育の最後に行われた滿蒙北支一帯における現地実習であった。そのスケジュールは表 4 に示した通りである。柳川と関連して重要な個所はゴシツク体で示した。

この現地実習で彼の記憶にとくに強く残ったのは、滿洲・黒竜江省牡丹江近くの横道河子にあった白系ロシア人の森林警察隊（謀略部隊）の養成工作の実態、および蒙古の砂漠の丘の上に建てられた日蒙両国人が共学す

表4 乙種長期学生滿蒙支実習演習予定計画〔1940年〕

日次	月日	発着時刻	発着地	摘要
1	9月1日	23:30	上野発	
2	2日	09:22 15:00	新潟着 新潟（月山丸）発	港湾防諜
3	3日			
4	4日	06:00 17:50	羅新〔羅津〕着 羅新〔羅津〕発	
5	5日	08:15	牡丹江着	5～7日 牡丹江特務機関業務見学 諜報、防諜、謀略業務 現地実習
6	6日			
7	7日	09:00 16:00	牡丹江発 綏芬河着	7～8日 綏芬河特務機関業務見学 国境停車場ノ業務見学
8	8日	13:45 19:40	綏芬河発 東寧着	8～9日 国境視察及国境警備要領ノ研究 東寧特務機関業務見学
9	9日	17:15 22:50	東寧発 綏芬河着	
10	10日	07:40 18:51	綏芬河発 横道河子着	10～11日 謀略要員ノ培養、訓練指導要領ノ研究
11	11日	23:16	横道河子発	
12	12日	07:25	哈爾賓着	12～16日 哈市特務機関業務見学 地方機関トノ連絡業務研究 文書諜報ノ見学 科学諜報ノ見学 謀略要員養成所見学 防諜及宣伝業務実習 志士ノ碑参拜
13	13日			
14	14日			
15	15日			
16	16日	09:45 15:10	哈爾賓発 新京着	16～18日 関東軍ノ一般諜報、防諜謀略業務見学 滿蒙ニ関スル研究
17	17日			
18	18日			
19	19日	18:50（急行）	新京発	

る日月寮の二つであったという。

白系ロシア人の森林警察隊は、北滿鉄道東部線（哈爾濱—綏芬河）の中間で東西の結節的要点に位置する横道河子を中心として、一九三九（昭和一四）年当時、牡丹江省、浜江省、三江省の三省にわたって九隊あり、各隊三〇〜四〇名で、隊員は滿洲国官吏の身分を与えられていた。匪賊討伐、アヘン原料のケシ栽培取締りを任務としたが、ソ連に対する威力謀略の含みを持ち、関東軍、滿洲国の取り決めにより隊員の任免権は関東軍にあった。ハルビン特務機関が軍警学校を管理し、この森林警察隊に各期六ヶ月の軍事教練を施すとともに、教科目として諜報、宣伝、謀略、兵要地誌を課していた。⁽⁵⁶⁾

しかしながら柳川はこの白系ロシア人の謀略部隊以上に、内モンゴル近くに設置された日月寮の方により強く心を動かされた。なぜならそこで学ぶ人々が若者であったからである。日月寮は一九三九年一月、駐蒙軍參謀長の田中新一少将の発意によって張北に開設された情報要員の教育機関であった。寮生としては、陸軍省の斡旋により毎年中等学校卒業生中の志願者から約二〇名を選定し、主として露、蒙、支の語学、情報勤務要領、蒙古事情などを教育し、修学年限を二年として錬成した。卒業生は情報部支部などに配属されて成果を挙げた。寮長は堀井久雄予備役少佐で、軍は教育内容を公表せず、各情報參謀、調査班長らが指導にあたった。終戦まで四期一〇一名（戦死一一名）を養成したとされる。⁽⁵⁷⁾

日月寮では日本人学生だけでなく、モンゴル人学生も加わって、日本人とともに学んでいたようである。柳川の回想を見てみよう。「一望千里、人とかげ（人影）一つ見当らない砂漠と草原の丘の兵舎で会った若い生気にあふれ、深海の緑を見る様によどみなくすみ切った若者の瞳は強く私の印象に残った。此等の若者のよどみなくすみ切った瞳から時折り見せる燃える真赤な情熱のかがやきは、私の青年道場計画の素因を作ったと共に、日月寮での感激は私に此の工作に対する限り無い情熱をわかせたと云へる」。このように現地の若い人々を指導する

という点が、彼の心の琴線に触れたのであった。

以上のように柳川は中野学校の教育最後に行われた海外現地実習において、北満洲・横道河子の白系ロシア人の森林警察隊、および内モンゴルに隣接する河北省張北の日月寮を訪問することによって、現地人を用いて情報・工作活動を行うという生きたモデルを実見した。そして日月寮で学ぶモンゴル青年たちの姿が、やがてジャワでタンゲラン青年道場（柳川のいう「ジャワの中野学校」）を開設し、インドネシア青年を訓練する上での大きなヒント、刺激となった。柳川は情熱家であり、若い人々に魂を吹き込むという教育家的な意欲を秘めていた。それが中野学校卒業間際の実習で強く引き出されたのである。

一九四〇（昭和一五）年一〇月、一年弱の課程を終えて陸軍中野学校を卒業した柳川は、同日、陸軍省および大本営陸軍部附となり、参謀本部第二部第六課に勤務するようになった。第二部第六課はすなわち情報部欧米課であり、その直前の八月に南方班が新設され、米英仏独南方の五班構成となっていた。⁽⁵⁸⁾柳川はこの南方班に所属したと考えられ、同地情報の収集整理にあたることになった。この「駆け出し時代」に彼は、蘭領東インド陸軍司令官がゲラルダス・ヨハネス・ベレンシヨット中将（Gerardus Johannes Berenschot）であり、同司令官がオランダ人とインドネシア人の混血の子孫である蘭印系オランダ人であることからインドネシア大衆に人気があるようだとといった基本知識を身につけていった。⁽⁵⁹⁾

柳川は、南方地域を専門とし、中野学校でも同地の事情を講義した経験をもつ村上公亮中佐の指導の下、同僚の市来竜夫囑託（戦後インドネシア独立戦争に参加して戦死）と机を並べて勤務した。柳川は市来を通じてインドネシア浪人として知られていた金子啓蔵と知り合い、山の手にあった金子の關係する塾に行つて、金子から話を聞くといったこともあった。開戦間際の一九四一（昭和一六）年一月中旬、第一六軍への派遣が決まると柳川は、結婚したばかりの市来にジャワ行きを誘い、「是非一緒に行つてくれ。市来さんが来てくれると大変助かる。

村上さんとは話し済みだが、奥さんに悪いな！」と頼み、市来が「かまいませんよ、是非頼みます」と快諾する一幕があった。⁽⁶¹⁾市来は村上大佐（中佐から進級）の推薦で第一六軍宣伝班員となり、さらに一九四三年以降はジャワ防衛義勇軍幹部錬成隊の翻訳室、幹部教育隊の指導部（従来の翻訳室を拡充したもの）で『陸軍歩兵操典』をはじめとする教育資料の翻訳に従事し、インドネシア世界に初めて近代用兵技術と軍用語をインドネシア語で伝えることに貢献する。⁽⁶²⁾その点で市来は柳川らの義勇軍幹部養成仕事を陰から支える一人となった。

太平洋戦争の開戦が迫る中で柳川らの業務は増大した。一九四一年秋、陸軍大学の構内に第一六軍司令部が設置され、一月に第一六軍参謀部の特殊勤務要員として中野学校出身の将校、下士官たちが選ばれた。司令部における彼らの任務は、情報参謀の指示を受け、作戦準備のため蘭印の兵要地誌、対敵宣伝、占領地住民工作など活動資料の収集整理を行うことであった。⁽⁶³⁾まず一月中旬に乙Ⅰ短の土屋競、富木正二、三宅見徳、米村政雄の各中尉、乙Ⅱ短の橋詰象資、星野鉄一、吉武智嘉男、六川正美の各少尉、丙Ⅰの片山康次郎、熊谷正男の各軍曹の一〇名が着任した。ついで一月下旬、やや遅れて参謀本部から柳川が転属して来ることによって、第一六軍附の中野学校出身の特殊勤務要員二名が全員揃った。彼らは厨次則少佐（戦前、在バタヴィア日本総領事館附武官）の指揮下に入り、対インドネシア宣伝ポスター、伝単の作成、整理、蘭印情報の収集整理に駆け回るなど「毎日が眼の廻るような忙しさ」だった。厨少佐から矢継ぎ早に出される指令を受けて、準備が積み重ねられていった。ジャワ方面から引き揚げて来たオランダ語、マレー語に熟達した青年、外国語学校出身の語学将校、下士官などが続々と配属され、「こったかえす様は早くも戦場のような騒ぎだった」。⁽⁶⁴⁾

このように中野学校卒業後の柳川は、まず参謀本部第二部第六課の南方班で蘭領東インド情報の収集整理にあたり、ついで太平洋戦争開戦直前には陸軍大学校内に設けられた第一六軍参謀部でより実戦に即した情報収集に従事したのである。これらの仕事は決して無駄にはならなかった。たとえばジャワに出征したある将校（第二師

団野砲兵第二連隊の大隊長）はのちに、ジャワ攻略作戦が成功した理由の一つとして「軍上層部の周到な計画と、戦前からの戦場兵要地誌の研究や準備が充分に行われていたことも、その大なる要素であった。たとえば、上陸以前に立派な敵国の地図を渡され、戦わずして敵国の地形が全く掌のうちにあったごときである」と回想している。⁽⁶⁵⁾

ちなみに第一六軍参謀部で柳川と一緒に中野学校出身者のうち、土屋競は中野卒業後に南方要員として台湾軍参謀部に赴任し、一九四一年五月に参謀本部から「蘭印地域を一回りして来い。段取してあるから南洋海運の本社へ行け」との指示を受け、身分を隠してセレベス島南端のマカッサル、ジャワ島のスラバヤ、バタヴィア、スマトラ島のパレンバンなどを巡り、参謀本部に報告書を提出していた。ついで土屋と入れ代わりに、やはり台湾軍参謀部にいた熊谷正男軍曹が参本に呼び出され、蘭印地域の旅行に出て行った。⁽⁶⁶⁾ 柳川のように東京勤務の者がいる一方で、蘭領東インドに潜入する者もいるといった具合で、参謀本部は開戦に備えて様々な形でインドネシア情報を集めていたわけである。

以上、前章と本章では戦場に出る以前の柳川が受けた教育、および陸軍における当初の勤務について述べた。彼は拓殖大学専門部南洋語組でマレー語や植民政策を学び、卒業後は陸軍の幹部候補生を経て少尉に任官すると陸軍中野学校に入り、情報・工作活動の基礎を学んだ。中野学校ではとくに「誠の精神」を心に刻むとともに、海外の現地実習で見た情報員養成学校の日月寮に強い印象を受け、これがのちにジャワで彼が企画運営するタンゲラン青年道場のヒントとなる。中野学校を卒業すると、参謀本部第二部第六課南方班で蘭領東インドの情報収集を行い、太平洋戦争直前、第一六軍参謀部に配属され、ジャワ島で特殊任務につくことが決定された。若き日の彼の人生はジャワで情報・工作活動を行う方向へと、あたかも自然な形で進んでいったのである。

三 情報・工作活動の影の局面

前章で見てきたような教育過程を経た柳川は、実際にジャワの現場でどのような情報・工作活動にあたったの
 であろうか。本章ではとくにこれまで表に現れることの少なかったその影の局面を明らかにしてみたい。

一九四二（昭和一七）年二月、輸送船団とともにカムラン湾に入った柳川中尉は、同じく中野学校出身の土屋
 競中尉とともに第二師団那須支隊に派遣の上、特殊任務につくことを命じられた。三月一日、第一六軍はジャワ
 島上陸作戦を行い、同島での進撃を開始する。柳川、土屋は那須支隊および第一六軍司令部の一部とともに上陸
 用舟艇に乗ってジャワ島西北端のメラク半島西側に上陸した。二人は第二師団参謀の佐藤英彦少佐の指揮下に、
 富樫武臣通訳、鈴木五郎通訳を伴い、軽戦車小隊とともに那須支隊の最先頭となつて前進した。⁽⁶⁷⁾

参謀の佐藤少佐は幼年学校、士官学校、陸軍大学校卒業の生え抜きの軍人である。富樫通訳は戦前、ジャワ島
 西部で雑貨業を、鈴木通訳はジャワ島中部で理髪業を営んでいたため、現地語に堪能であった。彼らとチームを
 組んだ柳川、土屋に課せられた任務は、最前線に出てルート状況を偵察把握し、周辺の情報を集め、場合によつ
 ては重要地点を確保することであった。⁽⁶⁸⁾

ここで柳川、土屋は初めて生々しい戦場を体験する。二人は上陸してまもなく、逃げ遅れたイギリス軍将兵に
 遭遇した。彼らをトラックから引き下ろし、後ろ手にして親指と親指を十文字に固く結び上げ、路上にうつぶせ
 に転がした。そこへ後続の銀輪部隊がやって来たのであとを託することができたが、さらに前進した地点で同様
 のことが再び起こると、今度は相手の方が多数で、しかも友軍からの距離が遠いという困難な状況に陥った。
 北の方角ではバタビア沖海戦の最中で、砲声、銃撃音が響き渡り、樹木の間から曳光弾が飛び交うさまが見え、
 時おり照明弾が打ち上げられて空が昼間のように明るくなった。⁽⁶⁹⁾ 以下の情景は『陸軍諜報員柳川中尉』にも書か

れているが、遺稿の方が詳しいので、そちらを引用してみる。⁽⁷⁰⁾

……此の夜戦の熾烈な爆発音と爆発煙火を見て、今迄至極おとなしく両手を後頭部に当てて立っていた英軍捕虜の態度が一寸と変ってきた。

私の前に集めていた三名の英軍将校の態度にも何か動きが感じられた。先頭に立っていた英軍の少佐の右手が動いた。私は無言で其の少佐の首筋に思ひきり軍刀を振り下した。

同時に少佐の右手の拳銃が火を吹いた。「パン／＼」二発で終り、少佐は突き飛ばされたように倒れた。「斬れ、撃つな、斬れ」と佐藤参謀の号令と同時である。

続いて私は少佐の後に立っていた二人の放心状態になっている英軍将校に突きを入れた。右からか左からか覚えていない。「ヤー」とでも此の時は云ったと思ふが、全く記憶がない。思ひきり二人共、軍刀で突き飛ばした。

声も立てず三人折り重なって倒れた。最初に斬った少佐の目が、振り下ろす軍刀の下でイヤに大きく追って来るよう〔う〕に感じられた。

一瞬のうちに三人を倒して振り向くと、未捕縛の英兵が逃げようとしているのを日本兵が追ひすがり、銃剣で突いている。銃剣の剣尖が英兵の背中を突き抜け、二十糎〔センチ〕程キラと白く胸元で月光に輝いてみえた。

道の両側で前後左右に次ぎ／＼と倒されて行く。私も突き専門で手当り次第倒した。誠に一瞬の出来事である。私共は死骸を路側に投げ出したまま、又前進を続ける。バンダム湾上にはまだ夜戦が続いていた。大がかりな火花

大会を見るようなものである。上下の照明の中に低空を飛行する敵の爆撃機も映し出されてみえる。曳光弾が飛び交ふ。誠に凄絶であった。然し遠くから見ている私共には本当に美しく思はれた。

ここで柳川は初めて敵兵を殺傷したわけである。無我夢中で行った様子がうかがえるが、とっさの場合にこうし

た瞬間的な行動ができたということは、あらかじめ軍刀で相手を斬る訓練をそれなりに積んでいたのではないかと考えられる。

セランに入ると、やはり同じような場面が再現された。今度は土屋中尉の回想を見てみたい。後続部隊がある程度、追いついて来たときの様子である。

午前四時、セランの街の入口に到着した。……

沈黙の街には人っ子一人見えない。……しばらくするうちにバンタムの前線から逃げ出した敵のトラック一輛がわが縦隊の中へ迷いこんできた。停車させられたトラックから両手を上げた英海軍の将兵が六名、ごそ／＼下車して来た。右腕を負傷し、夜目にも真白なホウタイで首に吊っている一名の印象が生々しい。まだ若い。水兵の水兵帽にはっきり「Prince of Wales」と書いてある。マレー沖で撃沈され、シンガポールからジャワまで逃げてきたらしい。

そんなトラブルで何分か時間が経った。「捕虜は連れて行けん。殺せ。射つな。突き殺せ」まだ無抵抗の人間に銃剣を突きさすなど憎悪心が湧いていない。「斬れ。突き殺せ」たまりかねた二、三名が軍刀や銃剣で一撃を加えた。バシツという音がして、もろくも倒れた敵兵の血が乾いた地面に吸い込まれていくのが薄い月明りをすかして見える。これを見て、傍にいた従軍記者がへたく／＼と地面へ座り込んでしまった。これが戦争だ。立場が逆になったら矢張り同じようにやられるだろう。戦闘は非情であり、野蛮化し、人間性を忘却した集団同士の殺し合いである。そこには普段のインテリ性なんて通用しない。⁽⁷⁾

こうした場面を経てセランの街を出た柳川、土屋らと軽戦車小隊は、約四五キロ先のランカスピトゥンに向かった。同地の鉄橋が無事であることを確認することが目標であった。オートバイ運転手の後ろに土屋が、サイドカーに軽戦車小隊長が座り、三人乗りとなって暗黒の道路を走り小部隊を先導した。途中で逃げ遅れたオラン

ダ兵一名を捕らえて道端の樹木に縛りつけ、ランカスピトゥンの鉄橋がまだ落ちていないことを聞き出した上で射殺した。⁽⁷²⁾

ランカスピトゥンに到着してからはゴム園で戦闘が行われた。柳川の目の前で日本兵一名が戦死した。柳川自身もヘルメットに銃弾を受けたが、かすり傷で済んだ。日本側は捕虜一名を確保したが、戦闘終了後、先の戦死した兵隊の中隊長（中尉）がこの捕虜を処刑することになった。しかし極度に緊張した中隊長は「実にまずい斬り方」をしたという。その光景が以下のように記されている。彼は真青になりながら目をすえて、後ろ手に縛られた捕虜に一〇数回にわたって切りつけたが、踏み込みが足りず、何度行っても剣先で傷をつけるだけであった。そこでついに捕虜は悲鳴をあげながら逃げ出した。周囲の者が「突け突け！」と叫ぶ中で、中隊長は捕虜の背中、腕、肩に所かまわず斬りつける。取り巻く日本兵を避け、右に左に逃げていた捕虜は最後につまずいて倒れ、そこに中隊長が追い打ちをかけたが、最終的には見かねた中隊長の伍長が銃剣でとどめを刺した。

この情景を見ていた柳川は捕虜に同情はしなかった。それよりも、顔を上げることができないほど青ざめて息をしていた中隊長が「男を下げた」ため、「本当にかわいそうに思はれた」という。この処刑はゴム林の中で、日本軍衆人環視の下で行われた。しかもその「殺人制裁」は「笑ひの内に終った」。皆、面白半分で見ているのである。「戦争といふものは人間を異情な状態マヤに持って行くものである。其の時は確かに私も笑った。確かに笑って其の中隊長の刀さばきの下手さかげんを見ていた。何かの『ゲーム』か劇でも見るような気持ちで其の殺人劇を見ていた。戦にはままこんな変則的な状態が起るものである」と柳川は記している。

なお、このような軍刀による処刑は海軍でも行われており、これは捕虜のケースではないが、現地人のスパイ、軍法会議で死刑判決を受けた者を銃殺ではなく、穴の前に連れ出して斬首により殺害した。たとえば、パプアニューギニアのマノクワリ（現インドネシア・西パプア州の都市）駐屯の海軍部隊の兵であったある者は、「処刑

される人達はすっかり観念したのか、とてもおとなしく処刑されていた」が、「気持ちの悪い情景であった」としている。⁽⁷⁴⁾ またボルネオ島バリクパパンの第三八一海軍航空隊の兵隊であった別の者は、「執行するのは若い将校たちである。腰にした伝家の宝刀の試し切りをしたい人たちで大勢の中から選ばれたらしい。……泣きわめき命乞いをする者、目隠しを拒否して相手をにらみ返す者、若い将校たちはその場の雰囲気にもまれ顔面蒼白で身震いをしていた。……大半の将校たちは切っ先が震えて正しく切った人はなかった。……血しぶきが飛び、辺りが真っ赤になる。それを銃剣で刺し穴へ落とすのが我々兵士だ。返り血を浴びて全身血達磨になった人もあった。それは全くこの世の出来事とは思えない。……地獄の光景そのものだった。そのことがあってから毎晩目隠しを拒否し恨みの目でにらみ返した男の顔が目には浮かび、寝つかれない夜が続いた」と思い起こしている。⁽⁷⁵⁾

上陸直後の柳川の行動に戻ると、敵と殺し合い、捕虜処刑の場面を目の当たりにする一方で、柳川、土屋らは敵情を探るためさらに戦場を進んだ。ボゴール西方で露営中、佐藤参謀は土屋中尉に前方のルビリアン橋の状況を探り、対敵投降工作を行うよう命じた。土屋は変装し、通訳と捕虜一名を連れ、住民から聞き取りを行いながら現地に向かったところ、橋は爆破されており、対岸にオランダ、オーストラリア兵が待ち構えていることがわかった。⁽⁷⁶⁾

橋が破壊されたため日本軍はルビリアンの街に釘づけとなった。そこで佐藤参謀は柳川中尉に情報収集と敵の後方攪乱のため潜行し、約二五キロ先のボゴールで部隊に合流するよう命じた。柳川は永田秀男通訳、富樫武臣通訳、混血捕虜一名とともにインドネシア人の物売りに変装し、全身の露出部に椰子油を塗り、その上にコーヒーの粉をこすりつけた。頭にベチ(イスラーム教徒の男性用帽子)をかぶり、椰子油のしみこんだ古着のシャツ、半ズボンを着てサロンを肩から斜めにつけ、天秤棒や荷籠をかついだ彼らは夜間に川を渡り、タピオカ畑や水田を走り抜けつつ、集落に來ると民家の庭先に「日本軍百万上陸」⁽⁷⁷⁾といった文句が記された伝單を撒き、時に爆竹

で蘭印兵を驚かし、最後は傷だらけの裸足を引きずりながらポゴールに到達した。ただしすでに日本軍の小部隊が先に入城しており、柳川は先着の佐藤参謀、土屋中尉から迎えられる形になった。⁽⁷⁸⁾

このように柳川や土屋の主な活動は、最前線の部隊に先行ないし同行して敵情を探ることであった。この点は柳川らと別に第一六軍の東海林支隊に派遣され、エレタン湾に上陸した富木正二、三宅見徳、六川正美の各中尉も同様であるが、彼らは柳川と異なる任務も課せられ、富木班は付近の橋梁、三宅班は鉄道線路、六川班は電話線をそれぞれ爆破した。⁽⁷⁹⁾

以上のごとく中野学校出身者には時と場合に応じて様々な指示が下り、そのつど彼らは臨機応変に対処していかなければならなかった。たとえば柳川は捕虜の尋問も命じられている。ルビリアンからポゴールに向けて潜行を開始する一時間余り前、夜の闇にまぎれてルビリアンの河を渡ろうと待機していた柳川は、佐藤参謀からオーストラリア人将校三名の取り調べを行うよう言いつけられた。これから攻撃をかけるルビリアンの敵砲兵の配置を知りたいのだという。すでに那須支隊の情報将校が取り調べを行ったものの、まったく手ごたえがないとことであつた。そこで柳川が急遽尋問にあたるのだが、その場面は『陸軍課報員柳川中尉』『カプテン柳川留魂録』には出ておらず、今回初めて公にされるものなので、煩瑣をいとわず以下に詳しく紹介したい。⁽⁸⁰⁾

インドネシア人の物売りに変装していた柳川は裸足であつたため、那須支隊の情報将校が準備してくれたサンダルを借り、永田通訳を連れて戦闘司令所の裏庭に向いた。そこには道路補修用のため小さく割られた角の鋭い割り石が山のように積まれており、その中で比較的平坦になつたところに三名のオーストラリア人将校の捕虜が二歩間隔で横並びに立たされていた。彼らの左右には歩哨が一名ずつ立って見張り、周辺には太いロープの端や折れた竹が散らばっていた。すでに数人の下士官、兵が叫びながら鞭で打ち、鉄拳の雨を降らせている。「止めろ」と情報将校が鋭い声で命じ、あごをしゃくって下士官兵を下がらせた。真中に左頬の腫れあがった青白い

顔、長身瘦軀の若い大尉がおり、その両横に中年で小太りの二人の中尉が立っていた。

情報将校が前に立つと彼らは不動の姿勢をとった。しかしその後につづく柳川と永田通訳についてはインドネシア人と思つたらしく、「小馬鹿にしたように」両脚をにわかには開いて休み、「傲然」と構えたという。ところが情報将校が「お願ひします」と柳川に挙手の敬礼をしたのを見て、彼らに驚きの様子が浮かんだ。

三人の前に立った柳川は、氏名と階級を言うよう永田通訳に英語で質問させた。すると中央にいた大尉が「貴方達は何物だ」と質問したため、永田が「日本軍の将校である。質問に答へろ」と言うと、彼らは驚いて顔を見合せ、著しく態度を変えた。柳川が歩きながら捕虜の一人一人を見て回ると、三人は緊張して不動の姿勢をとった。大尉は永田通訳に対し、先ほどは失礼したと何度も頭を下げる恰好をした。

柳川は「貴官等から貴軍の砲兵の布陣の状況を聞き度い」と尋ねた。つづいて「勿論貴官等は云ふまい。然し私には別に云はせる方法がある。貴官はどうか」と大尉を指差すと、大尉は巍然とした態度で胸を張り、すぐに「ノー」と答えた。左右の二人の中尉にも指を差して聞くと、次々にノーという言葉が返ってきた。さらに柳川は同じ質問を二回くり返したが、彼ら一人一人の目をにらみつけているうちにおおよその見当がつくようになり、左端に立っている口ひげをたくわえた中年の中尉に望みをかけることにした。その中尉の目は次に起こる事態を予想して恐れおののき、次第にうつろになり、心の動揺がはつきりと見て取れた。

柳川は歩哨に命じて彼らの間隔を五歩ほどに開かせた上で、まず真中の若い大尉の前に立った。「砲の配置を説明せよ」「ノー」「永田突け！云ふまいが突け！」永田通訳が何度聞いても、返ってくるのは「ノー」の一点張りであった。永田は柳川と呼吸を合わせ、柳川の早口の短い言葉を適確に訳し、激しく質問をつづけた。その上で頃は良しと感じた柳川は、「永田止め、兵隊来い！思ひ切り打ちのめせ」と後方に待機している下士官兵二名に命じた。二人は竹の棒で大尉を打ち、接近すると蹴り、つづげざまに殴打した。それでも大尉は顔色一つ

変えず、平然と立ったままであった。以下原文を引用する。

「止める、俺がやって見る」と兵隊の打つのを止めさせ、私はサロンを永田に渡し、大尉に近づくと一気に体落しをかけた。大尉は頭から割り石の上に突っ込んだ。

「立て！」立つのを待たず無言で投げる。立ち上ったのを拳を固めて空手よろしく突きあげる。若い大尉は額を切りアゴを破り、顔中を血だらけにしている。血は頬をつたい頸筋へと流れる。顔の傷口には割り石がつきささったままになっている。白い顔が赤黒く腫れあがって倍程の大きさになっている。真紅の血潮に染まり乍も若い大尉は苦痛一つ表はさない。

其れを見ると私に「そう腹立たしくなり、又投げ飛ばし」「サンダル」で顔と云はず踏みつける。「スタンダップ」「アッテンション」苦痛に耐えて何度でも若い大尉はスックと立ち上がる。絶大な気力と体力である。

「砲兵の配置を説明せよ」永田が適切に機を見て質問するのに依然として「ノー」と答へる。私はあきれ一とき入れている時、若い大尉は永田に向ってペラ／＼と反問した。

「私は濠州の陸軍士官学校で教育を受けた。其の時日本には武士道と云ふものがあると教へられた。貴官等が今私にしている行為は日本の武士道に反するものではないか、貴官が私の立場に置かれたらどうするか教へてくれ」

私には士官学校と「武士道」と云ふ言葉が判った。永田の通訳を聞く間、中「武士道」と云ふ言葉が此の若い濠州軍大尉の口から出て来たことに驚いていた。

彼は永田の通訳が終わると又続けた。「武士道とは死ぬる事であると教はった。私は友軍の情報は絶対に云はない、出来るだけ早く殺せ、望みは早く殺されることだ！」と悲痛な声を挙げた。

其の時の大尉の姿は全く見事であった。顔中と云ふより露出している箇所は総て鮮血に染め乍らも肩と腕を張り不動の姿勢をとっていた。思はず私の口から「立派だ」と感嘆の言葉が出た。此の若い大尉は年令僅か廿六才の青年将校であった。

以上のように柳川はオーストラリア軍の大尉に殴る蹴るの尋問を行った。ところが大尉は口を割るところか、彼の全人格をかけた毅然とした態度でそれを拒否し、その姿を見た柳川は畏敬の念を抱かざるを得なかった。しかしその一方で柳川には算段があった。それは先にあたりをつけていた口ひげの中尉にターゲットを絞るということであった。「私は大尉の拷問を止めて、いよく本番にかかることにした」。すなわち、あえてその口ひげの中尉をその場に残して、彼の目の前でもう一人の別の中尉を水責めにしたのである。

手足を兵隊共に押へさせて動けなくした中尉に、大バケツに間断なく搬ばせた水を顔中で飲ませた。人間の眼も鼻も水を飲むのではないかと思はれる程、またたく間に此の中尉の腹が二倍にも大きくなるのを私は見た。

飲ませれば飲むものである。またたく間に腹がふくれ上り、水を顔中でふき出して苦しむ状景を此の時初めて私は見た。

この「阿修羅の状況」を放心状態で見ていた口ひげの中尉は簡単に落ちた。別室に連行された彼を柳川が尋問すると、たちまちオーストラリア軍の砲火の位置を説明した。この情報によってルビリアンの豪州軍を攻撃する際の重点が決定され、同軍撃破にきわめて役に立ったと佐藤参謀のちに感謝したという。しかし柳川には手柄を立てたという心地の良い満足感は得られなかった。それよりも彼とさして年齢の変わらない先の大尉の壮絶な姿の方が衝撃であった。口ひげの中尉が別室に連れ去られるのを見て、大尉は中尉を罵倒し、「濠州魂を持たんか」と叫んだ。「其の若い大尉の声は悲痛であり、慄然とするものがあつた」という。

此の時若い大尉が中尉に対して叫んだ叱声が彼の私に対する反問と共に私の脳裏から未だに離れない。其の声は日本の武士道を批難し、日本の明日を暗示した声に聞かれた。私が若し彼の立場に立たされたらどうか？ 大尉の如く

立派に振る舞い得るか？ 全く疑問であり、私にはたえ得ると云ひ切る自信が無い。

私は武士道に対する若い大尉の質問には答へずに終った。「貴官がしていることが武士道か？」「武士道とは死ぬことと聞いていた、殺せ、殺してくれ！」と云ふ絶叫が今も尚私の脳中に生きている。

濠州軍強しと云ふ印象と共に、絶対に私の頭からぬぐい去ることの出来ないもの一つになっている。此の取調べには約二時間を要した。情報は確度甲として報告した。

以上の場面では拷問に屈しなかったオーストラリア軍大尉の態度がきわめて印象的である。このときの光景はそれから二〇年以上の間、柳川の脳裏から消え去らず、彼を煩悶させ続けた。ただしその点についてはこれ以上触れない。ここで着目したいのは、敵地潜入のため渡河を行おうという慌ただしいさなかに突然命令を受けた柳川が、短い時間であるにもかかわらず巧みに拷問、尋問を行い、作戦に不可欠な情報を仕留めていることである。まずもつとも脆弱そうな口ひげの中尉に目をつけ、その中尉の眼前で上官の大尉に体落としをかけ、彼を殴り、踏みつけ、血みどろにする。大尉が屈しないのを見ると、今度はもう一人の中尉を水責めにして口ひげの中尉を恐怖の底に陥れる。その結果、口ひげの中尉はあえなくルビリアンの豪州軍砲兵の布陣を白状し、最終的に柳川は戦鬪の勝利に大きく貢献した。

それまで戦場の修羅場を経験したことがないにもかかわらず、状況に即応してこのような成果をもたらしたということは、そこに中野学校出身者の秘密戦士としての資質と力量が示されているのではないかと考えられる。前述のように相手を心理的に追い詰めていく手法、拷問のテクニクを柳川はどこで学んだのであろうか。拓殖大学、陸軍飛行学校・航空学校ではそのようなことは教えないであろうし、参謀本部、第一六軍参謀部では情報収集・整理のデスクワークに専念していたわけであるから、つまるところそれは中野学校以外には考えられない。中野学校のカリキュラムの中にそのようなことを教えたと思われる科目は特定できないものの、彼は同校で類似

のことを学び、それを実地に応用してみせたのではないだろうか。通常の将校であれば、いきなり捕虜尋問を命ぜられてもどうしてよいかわからず、やみくもに暴力をふるうことはあっても、計算高く拷問を行うことなどできないであろう。実際に柳川の前に尋問にあたった情報将校は相手の口を割らせることができなかつた。

以上と共通する事例がもう一つある。一九四二(昭和一七)年四月二十九日の天長節におけるラジオ特別放送の工作である。連合軍降伏後、バンドンに特務機関である第二師団参謀部分室(勇分室)が開設され、柳川らは現地の治安維持など多くの業務に追われていた。そうした中で佐藤参謀から次のような工作を命じられる。天長節の夜八時、バンドン放送局の特別番組として、前オランダ総督またはそれに次ぐオランダ人高官にインドネシア語でオランダ三四〇年間の圧政搾取に対する謝罪を行わせる。同時にその高官自身の口から天長節の祝賀を述べさせるというのである。この命令は天長節当日のわずか二日前に下されたため、柳川は著しく短い準備期間でこれを実行しなければならなくなつた。⁸¹⁾

まず「吾等誤までり」と題する洋紙二枚の原稿を作つた上で、富樫通訳とともにそれをもってチャルダ・ファン・スタルケンボルフ総督 (Alidius Warmoldus Lambertus Tjarda van Starckenborgh Stachouwer) 以下の蘭印政府高官が収監されているスカミスキン刑務所を訪ねた。刑務所は日本軍の憲兵隊が管理しており、憲兵下士官および上等兵の案内で調査を行った結果、総督はインドネシア語ができないためこの役目は無理であることがわかつた。最終的にインドネシア語に堪能な唯一の大臣級人物として内務長官が適任であることが判明し、憲兵に鉄扉を開かせ、本人に説得を開始した。

内務長官は小太りでオランダ人としては比較的身長の高い方であり、五〇歳近い年齢に見受けられたという。顔を見合わせているうちに、柳川は「此奴は物になる」との感触を得た。彼以外に候補者はいないため、柳川も自ずと気迫を込めて、「貴官にこれをラジオで放送して戴きたいと思つて来た。まず読んでみて下さい」と単刀

直入に依頼した。一読して驚いた長官は額にしわを寄せ、柳川から見ると「人を小馬鹿にした」態度をとりつつ、自分は女王陛下の許可を得なければ何事もできないと拒絶した。

「やって下さい」「絶対にしません」という押し問答の末、柳川の態度も「やれよ」と高圧的になった。柳川がにらみつけると、長官は「ネエー」（できない）と薄笑いを顔に浮かべ、さらに強要すると、うるさいといった調子で「できない」と口を一文字に結んで言い切ったため、柳川は「よろしい、死んで戴きませう」と冷やかに言い放った。

通訳の言葉がわかりかねたらしく長官は「一瞬ボカーンとしていた」が、柳川は憲兵上等兵に命じて独房から彼を引き出させた。その際、長官は憲兵から歩けと突き飛ばされたので、柳川の言葉がただの脅しでないことを悟り、顔色を変えていった。刑務所の建物から外へ出された長官が芝生の上に一人立たずんでいるとき、柳川は憲兵たちを制した上で、五メートルほど先の長官の足元に黙って拳銃を発射した。「キーン」という音が刑務所内に響き渡り、衛兵所から驚いた兵隊が飛び出して来た。弾は長官の足元の右前方二メートルほどの芝生の中に撃ち込まれており、ぴくりとして振り返った彼は、それが自分を狙ったものだとかかると青白い顔を土色に変えた。

長官の肩は落ち、姿勢は前かがみになり、「青葉に塩以上の変わりよう」となった。『陸軍諜報員柳川中尉』では、これは見込みがあるぞと思つた柳川がさらに責めあげると、長官はついに「ヤー」と悲鳴を上げながら承知したとある。⁽⁸²⁾しかし遺稿では以下のようにもっと詳しい描写がつづいている。柳川はほくそえんで長官を衛兵所の裏に連れて行かせ、憲兵に責めるよう命じた。しかし柳川から見れば憲兵のやり方は甘いものに映った。

手ぬるい殴打に私は棒切れを二本持つて来させ、憲兵にかわり自分で持つて長官を攻め上げた。棒を左手の小指、

薬指、中指の間に挟み、左手の指を思い切りねじり上げた。

「ヤー(ア、エ)かネエ(ア、エ)か」長官はウギアーと奇声を発して、広い額に玉の汗を噴き出させた。実際のところ二分も必要とはしなかった。最後の私の攻めは見事に成功した。指は変な型に変形したが、悲痛な彼の「ヤー」という声を聞くのに大した時間は要さなかった。

かくして柳川は内務長官を協力者とすることに成功した。その身柄を刑務所から預かると、合同宿舎に連れて行ってすぐに放送の練習をさせた。通訳全員を集め、「発声に元気が無い」「モット言葉に力をいれよ」「棒読みして何になる」「モット誠意をこめてしゃべれ」と一節ごとに皆で叱責した。

無理に練習させると若干良くなつたので、柳川は別に準備してあった「奥の手」を取り出した。土屋中尉が敵性婦女子抑留所から連れて来ていた長官の妻と娘（二七、八歳）である。練習が一段落したとき、お互いが離れたところから顔を見交わすことを許した。親子三人は万感を込めた瞳と瞳で見つめ合っていたという。お互いの瞳は自然にうるみ、まず妻が目をそらし、その母親の腕の中に倒れ込むように抱かれた娘がじっと父親に眼差しを向けつつづけていた。その娘の視線は時折、憎悪を込めて柳川たちに注がれた。無言の対面は二分間ほどで打ち切られた。

柳川は「貴官の明後日の放送がうまく出来たら特に妻子に会わせてやる。家族の身分は私が保証する。しかし万一私の期待に貴官のそむく場合には、貴官はもちろん娘のことも覚悟していてもらいたい」と脅した。長官が「放送が終わりますと、妻や娘に会わせてくれますか」と洩らしたため、柳川がうなずくと、彼の顔に若干生気が見え、翌日の練習では発声も太くなり、段々と力が入っていった。

こうして四月二九日の天長節の夜、バンドン放送局で放送が実行された。ガラス張りの小さな放送室に入った

内務長官は腰掛けてマイクに向かい、柳川はその後ろに立ち、長官が裏切ったときを想定して彼の後頭部一寸（約三センチ）のところに拳銃の銃口を構えた。柳川が一心に成功を願う中、原稿にして二枚、時間にして三分少々の放送は無事終了した。長官の声は少しふるえていたが、それまでの練習時よりも段違いに良くできたように思え、安堵した放送関係者は喜んで柳川と長官を取り囲んだ。同夜、柳川は約束通り、彼と妻、娘の面会を許し、翌日午後、家族は再び引き離された。

以上の天長節ラジオ放送工作も、先のオーストラリア軍将校拷問と共通点が見られる。突然命令を受け、ごくわずかな期間であるにもかかわらず、相手を巧みに脅迫拷問して、目的を達成したことである。長官の足元に銃弾を放ち、憲兵の拷問が手ぬるいといつて自ら彼の指の間に棒を挟んでねじり上げるなど、初めてとは思えないほど手慣れている。しかも前の場合と異なり、今度は長官に鞭だけでなく館（妻子）もしゃぶらせている。やはりこれらも中野学校で学んだことを実際に生かしたものであったのではないだろうか。

本章では、柳川の情報・工作活動について、これまで十分明らかにされていなかった敵国人に対する冷酷、無慈悲な影の局面を見てきた。中野学校で柳川をはじめとする学生たちは「誠の精神」を肝に銘じたが、だからといって彼らがつねにクリーンな態度を持していたわけではない。目的を達成するためには汚い手も使った。そのことをここで改めて押さえておきたい。

おわりに

本稿では太平洋戦争期、ジャワにおける陸軍中野学校出身者の情報・工作活動について、柳川宗成中尉（のち大尉）を中心としてその遺稿を手がかりに検証を行った。結論として以下を指摘することができる。

第一に、柳川の教育過程を検討した。まず彼は拓殖大学専門部南洋語組で学んだが、同大学は相当数の卒業生を南方地域に送り出しており、柳川もその学風の下でマレー語や植民政策を学び、インドネシアを含む南の世界を指向していたといえる。次に拓大卒業後の彼は、陸軍の幹部候補生を経て少尉に任官すると同時に陸軍中野学校（当時は後方勤務要員養成所）に入り、情報・工作活動の基礎を学んだ。中野学校では諜報、謀略だけでなく、とくに「誠の精神」を心に刻むとともに、海外での現地実習の際、張北で見学した情報員養成学校・日月寮に強い印象を受け、これがのちに彼がジャワで企画運営するタンゲラン青年道場のヒントとなる。中野卒業後は参謀本部第二部第六課南方班で蘭領東インドの情報収集を行い、太平洋戦争直前には第一六軍に加わりジャワで特殊任務につくことが決定された。若き日の彼の人生はジャワで情報・工作活動を行う方向へとあたかも自然な流れに沿うかのように進んでいったのである。

第二に、柳川の情報・工作活動の実態を検証した。ジャワ島上陸直後の彼の任務は、最前線に出てルート状況を偵察把握し、その周辺情報を集め、場合によっては重要地点を確保することであった。またインドネシア人の物売りに変装した柳川は通訳を連れて現地に潜行し、民家に伝単を撒き、爆竹で蘭印兵を驚かすなどの後方攪乱も行った。さらにオーストラリア軍将校の捕虜を拷問して同軍の砲兵配置を聞き出すことにより戦闘の勝利に貢献し、あるいは在蘭印連合軍の降伏から間もない時期に天長節のラジオ特別放送工作を実行し、蘭領東インド政府の内務長官をやはり拷問にかけて脅迫し、謝罪文を朗読させるといった策略も遂行した。こうした偵察、情報収集、後方攪乱、拷問、相手の心理的な追い詰め、謀略工作といった一連の活動は、中野学校でその基礎を学んでおかなければできなかったであろうと考えられる。またこれらに際して特徴的なのは彼の適応力である。柳川はそれまで体験したことのない戦場において不測の事態や急な命令に次々と出くわしたが、いずれも臨機応変に即応して成果をあげている。そこに中野学校出身者の秘密戦士としての資質と力量が示されているといえよう。

従来の研究では中野学校を論じる場合、本稿のように密室的環境の下でなされた暗い部分の実例を具体的にとり上げることが少なかつたといえる。しかしながら中野学校は情報戦、謀略戦の戦闘員を養成する機関であり、当然のことながら卒業生はきれいごとでは済まされないグアターティーで陰惨なビジネスに手を染めなければならなかつた。

ただし中野学校とその卒業生を純黒に描き出すことには片寄りがあろう。同時に純白にのみイメージすることもまた誤りであることはいうまでもない。そのため本稿では柳川を中心にジャワにおける中野出身者の情報・工作活動の影の局面のみを考察したが、別に稿を改めて、多くの人々の目に触れる中でなされたその光の局面についても検証してみたい。中野学校の教育と「誠の精神」はジャワでどういった形でポジティブに生かされ、発揮されたのであろうか。加えて柳川らの行動はいかなる成功面、失敗面をもたらし、その要因はどのようなところにあつたのかという問題も検討しておきたいところである。影の局面と光の局面の双方を合わせ見ることによつて、彼らの活動のよりバランスのとれた姿がつかめるのではないかと考える。⁽⁸³⁾

- (1) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 蘭印攻略作戦』（朝雲新聞社、一九六七年）の第八章「ジャワ島攻略」。
- (2) 中野校友会編『陸軍中野学校』（中野校友会発行、原書房製作、一九七八年）の第Ⅱ部・第四編第九章「インドネシアにおける諸政策」五〇一―五〇二頁。別班長となつた丸崎大尉は中野学校一期生で、開戦前から在スラバヤ日本領事館員に偽装して現地調査を行つており、開戦後は抑留されていたが、第一六軍上陸にともないこれに合流した（同上、五〇〇―五〇一頁）。

(3) 同右、五〇四頁。

(4) 同右、五〇二、五〇四、五〇六―五〇八頁。

- (5) 同右、五〇五頁「ジャワ派遣第十六軍中野出身者の一覧表」、および五二〇—五二二頁の第九節「第十六軍と中野出身者」を参照。
- (6) 柳川宗成「ジャワの別班」『週刊読売』一九五六年二月八日臨時増刊号・特集「日本の秘密戦」、一五卷五三号、一四九—一五五頁。
- (7) 柳川宗成『陸軍謀報員柳川中尉』（サンケイ新聞出版局、一九六七年）。
- (8) 柳川宗成著、井上治編著『カプテン柳川留魂録—ジャワ防衛義勇軍・柳川宗成遺稿集—』（鳳書房、一九九七年）。なお同書の書評として、石橋重雄「柳川宗成遺稿集『カプテン柳川留魂録』」『問題と研究』二七巻一〇号、通巻三二二号、一九九八年七月がある。
- (9) とくに森本武志『ジャワ防衛義勇軍史』（龍溪書舎、一九九二年）は、ジャワ防衛義勇軍の設立経緯から戦後に与えた影響に至るまで膨大なインタヴューをもとに詳述した浩瀚な大著であり、柳川の果たした役割についても紹介している。またジャワ防衛義勇軍については、井上治著、森本武志証言『日本人指導官の意識と行動—森本武志—ジャワ防衛義勇軍—』（鳳書房、一九九五年）、森本武志編著『在ジャワ日本軍の兵器の行方—第十六軍とインドネシアの独立—』（鳳書房、二〇〇〇年）も参考になる。
- (10) 加瀬英明『ムルデカー一七八〇五』（自由社、二〇〇一年）、二四〇頁。
- (11) 倉沢愛子「ペターPETA」桃木至朗（代表）、小川英文他編、石井米雄他監修『新版 東南アジアを知る事典』（平凡社、二〇〇八年）所収、四〇一頁。
- (12) ジョージ・S・カナヘレ『日本軍政とインドネシア独立』（鳳出版、一九七七年）、一八六頁。
- (13) Nugroho Notokusanto, "The PETA Army in Indonesia 1943-1945," in *Japan in Asia 1942-1945*, ed. William H. Newell (Kent Ridge, Singapore: Singapore University Press, 1981), 43.
- (14) 村上兵衛「柳川宗成氏を悼む」『京都新聞』一九八五年一月二〇日。
- (15) 村上兵衛氏は上記の追悼文を発表したすぐあとに「インドネシアの若き獅子たち」を執筆し、インドネシア青年を教育する柳川の姿をより詳しく描写している。これは拓殖大学海外事情研究所の紀要『海外事情』三四巻二—四号、一九八六年二—四月に三回にわたって連載され、さらに小冊子『インドネシアの若き獅子たち』（拓殖大学麗沢会事

務局、一九八六年七月）としてまとめられた。拓大が「柳川先輩」を大切にし、その功績の記録に熱心なことがうかがえる。ちなみに「インドネシアの若き獅子たち」は、村上「アジアに播かれた種子^{たね}」（文藝春秋、一九八八年）に第一章として再録された。

(16) 原稿の本文末尾にあたる第二章四二頁・通し一〇六六頁に「一九六六年十月二十六日 於ジャカルタ プジョ
ンポンガン 柳川宗成」と記されている。

(17) 原稿の第四章一〇頁・通し一九八頁と一一頁・通し一九九頁との間に一ページ分の落丁がある。また第一章四三頁・通し六九〇頁の次のページから欠落しており、第一章は完結しないままで終っている。さらに第一章一二頁・通し八一六頁と一四頁・通し八一七頁の間がやはり抜け落ちていた。

また以上のほかに、第四、一一、一五、一六章にもともと写真が貼られていたと考えられるページが合計一〇数ヶ所あり、キャプションはそのまま写真が取り外された形となっている。そうした写真が残されていれば貴重な資料となったであろうが、現在その所在は不明である。

なお拓殖アーカイブズ事業室は遺稿の現物をコピーし、上下二冊に製本した複本を作成しており、本稿の執筆にあたってはそちらを利用した。オリジナルの原稿では柳川自身が各章ごとにページ番号を付しているが、複本ではアーカイブズ事業室が全体を通してのページ番号もナンバリングしている。本稿では引用にあたって、原本に記された章ごとのページ番号、ならびに複本に刻印された通しページ番号の二つを記載する。

(18) 『陸軍諜報員柳川中尉』巻末の二五六頁に、「本書の原稿は千数百枚におよぶ膨大な記録であったが、とても全文を収容することができない。そこで思いきって圧縮したことを著者ならびに読者におことわりしておきます。（編集部）」とあるが、この編集部がすなわち宮澤氏である。

(19) 遺稿、巻末B「工作図表」、一〇七二―一〇七三頁。この「工作図表」は表題と異なり図表は含んでおらず文章のみである。

(20) 遺稿第八章「セタン往来」は、タンゲラン青年道場で使用人として働いていたインドネシア女性たちにくつもの幽霊（セタン）が次々と取り憑いて騒ぎになったという内容である。

(21) 遺稿第一三章「ボゴール風物詩」は、ある若い日本人将校が男女両方の性器をもつ私娼を見たというので、柳川

がその将校と通訳を連れて当の女性の下に出かけていき検分したという話、あるいはボゴール幹部教育隊がインドネシア人隊員の演習を市内で実施中、雑木の茂みの中で昼間から性の営みを楽しんでいる現地の若い男女が時折見られたため、柳川が一喝して追い払ったがあとで気の毒に感じた、といった「桃色話」を収めている。

(22) 遺稿第一四章「中団長の死」は柳川の工作にかけた執念を描写しており、情報・工作活動の観点からは重要であるため、本稿とは別の論稿でその要所を紹介して考察する予定である。

(23) 遺稿第二三章「ジャカルタ雑記」は戦後の柳川とインドネシアの関わりについて記しており、柳川が一九五九(昭和三四)年のスカルノ大統領(Sukarno)二度目の来日時に大統領に会見し、翌一九六〇年、若林晃行の世話で川崎に居を移して「インドネシア関係に専念」するようになったこと、一九六二年にインドネシア陸軍に招待されて同国を訪問したこと、さらにインドネシア居住後の一九六五年に軍事クーデタ(九月三〇日事件)が起こった際は日本大使館のために軍関係の人脈を生かしてボランティアの情報収集にあたったこと、また同事件で殺害された陸軍司令官アフマド・ヤニ中将(Ahmad Yani)の思い出などが綴られている。

(24) 後藤乾一「柳川宗成」石井米雄監修、土屋健治他編『インドネシアの事典』(東南アジアを知るシリーズ、同朋舎出版、一九九一年)所収、四三五頁。

(25) 井上治『ジャワ防衛義勇軍(PETA)と柳川宗成氏(専門部一〇期)』(創立百年史編纂室シリーズNo.1、拓殖大学創立百年史編纂室、一九九八年)。井上治「解説」前掲、柳川著、井上編著『カプテン柳川留魂録』所収。

(26) たとえば、伊藤貞利『中野学校の秘密戦―中野は語らず、されど語らねばならぬ』(中央書林、一九八四年)、加藤正夫『陸軍中野学校―秘密戦士の実態』(光人社、二〇〇一年)、ステイブ・C・マルカード著、秋場涼太訳『陸軍中野学校の光と影―インテリジェンス・スクール全史』(芙蓉書房出版、二〇二二年)など。また斎藤充功『陸軍中野学校全史』(論創社、二〇二二年)はインドネシア自体に言及していない。

(27) 柳川著、井上編著『カプテン柳川留魂録』所収の年譜、一四七頁。

(28) 井上治、坪内隆彦「拓殖大学・南洋語(インドネシア語等)及び南洋(東南アジア)研究の系譜」『拓殖大学百年史研究』第一一号、二〇〇二年二月、三一、四五頁。

(29) 同右、四六、四八―四九頁を参照。

- (30) 拓殖大学創立百年史編纂室編『拓殖大学百年史』通史編一 明治大正期（学校法人拓殖大学、二〇一六年）、六〇六頁、『拓殖大学百年史』通史編二 昭和前期（二〇一七年）、六三三頁。
- (31) 同右、『拓殖大学百年史』通史編二、六三八―六三九頁。
- (32) 前掲、井上、坪内「拓殖大学・南洋語（インドネシア語等）及び南洋（東南アジア）研究の系譜」五四頁。
- (33) 近藤富男『鉄橋爆破行―インドネシア独立戦争の陰に散った旧日本軍人の鎮魂碑―』（創立百年史編纂室シリーズ No.21、拓殖大学創立百年史編纂室、一九九九年）、一〇―一一頁。
- (34) 若林光也著、宮澤正幸編『インドネシア独立の夢―特別青年隊始末記―』（創立百年史編纂室シリーズインドネシア特集号、拓殖大学創立百年史編纂室、二〇〇〇年）。
- (35) 久保正明、池田憲彦聞き手『「聞き書き」バリ島防衛義勇軍錬成隊 教官 今石貞二郎（専門部一六期）―インドネシア・PETA（義勇軍） 外史として―』（『拓殖大学百年史研究』第一号、二〇〇二年一二月、前掲、森本『ジャワ防衛義勇軍史』一八五―一八六、一八九、五四―一頁）。
- (36) そのほかにインドネシアで活動した拓大出身の陸軍将校としては、蓮田辰夫大尉、龍崇中尉、水田嘉彦少尉、三根孝一少尉などがある（前掲「バリ島防衛義勇軍錬成隊 教官 今石貞二郎」五頁）。
- またそれ以外の拓大出身者の興味深いケースとして、石井淑普（学徒動員により一九四三年商学部卒業）の例がある。石井は拓大では中国語を学んだものの、陸軍特別操縦見習士官の南方要員としてジャワ島に送られ、少尉として終戦を迎えた。しかし一九四六年に日本軍を離隊し、独学で身につけたマレー語を生かしながら、かつて軍属として柳川の下で働いていた市米竜夫を指揮官とする特別遊撃隊に加わって独立戦争に参加し、インドネシア青年の軍事教育、訓練にあたった。一九五〇年、インドネシア国軍退役後はジャカルタの日本総領事館、大使館などに勤務し、経済班のスタッフとして調査や翻訳に従事し、北スマトラの石油開発会社勤務を経て一九八一年にはインドネシアの在留邦人や日本企業に情報を提供する会社・翻文館を設立する。独立戦争参加という道を選んだ石井とそうではない柳川は、同じ拓大の同窓であり、ともにインドネシア国籍（石井一九六三年、柳川一九六九年）を取得したが、戦後の関係は必ずしもしっくりとしたものではなかったという（井上治『学部四二期・サトリア石井（石井淑普）氏追想』インドネシアに捧げた生涯』創立百年史編纂室シリーズ No.26、拓殖大学創立百年史編纂室、二〇〇〇年）。

- (37) 拓殖大学創立百年史編纂専門委員会編『拓殖大学百年史 部局史編』(学校法人 拓殖大学、二〇〇二年)、三一九頁。
- (38) 『拓殖大学一覽 昭和十三年十月』、五七―五八頁、拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室所蔵。拓殖大学発行であるが、奥付がなく、発行者、発行年の記載もない。昭和十三年一月は柳川が卒業してから一年七ヶ月後にあたるが、「拓殖大学学生心得」自体は柳川在学時と変わっていないと考えられる。
- (39) 記念写真誌編集委員会編『拓殖大学創立一〇〇周年 一九〇〇―二〇〇〇「右手に文化の炬をかけた」図絵で見ると紅陵の青史』(拓殖大学、二〇〇〇年)、一九八頁。同様の文章が記念写真誌編集委員会編『拓殖大学学友会創立一〇〇周年「月日は百代の過客にして」』(拓殖大学学友会、二〇一〇年)、二二三頁にもある。どちらも宮澤正幸氏の執筆個所である。
- (40) 歌詞は前掲、『拓殖大学一覽 昭和十三年十月』の冒頭ページより引用した。
- (41) 「拓殖大学専門部 昭和九年度学科課程」(一九三三年二月二六日)、百年史資料集編集委員会編『拓殖大学百年史 資料編七』(学校法人 拓殖大学、二〇一四年)所収、四三―四五頁。
- (42) 前掲、「バリ島防衛義勇軍錬成隊 教官 今右貞二郎」六一―七頁。
- (43) 前掲、「拓殖大学専門部 昭和九年度学科課程」、四三―四五頁。
- (44) 前掲、中野校友会編『陸軍中野学校』二五、八三九―八四一、八四九―八五〇頁を参照した。
- (45) 同右、三七頁。
- (46) 一九三九年二月一日・秋草俊所長より畑俊六陸相宛「昭和一四年度学生入所景況の件」JACAR (アジア歴史資料センター) : RefC01004842000_密大日記 第一一冊 昭和一五年 (防衛省防衛研究所)。同日、乙 I 長学生と時間をずらした形で、乙 I 短学生の身体検査、入所式も別途行われた。なお下士官の丙 I 学生については約一カ月前の一月五日に同じ場所で身体検査、入所式を行っており、日曜日で省内が静かであったため、保秘上の問題は起きなかった。そのとき訓示を行ったのはランクの落ちる陸軍省兵務局長・中村明人少将、参謀本部第二部長・樋口季一郎少将、および秋草所長であった。
- (47) 遺稿第七章六一―四頁、通し三三五―三四三頁。『陸軍諜報員柳川中尉』では中野学校に関する記述はかなり省

- 略されている。また柳川は後年、遺稿原文の語句を修正し、少しく加筆した上で、『ボゴール通信』に再録した(モトシゲ・ヤナガワ「ムアラカラン閑話(第一話)」タンゲラン青年道場誕生すⅡ(一)、『ボゴール通信』第六号、一九八六年一月二五日、森本武志編集・発行責任、ベタ関係者会事務局発行、四―五頁)。この「ムアラカラン閑話」は、柳川著、井上編『カプテン柳川留魂録』七四―八〇頁にも収録されている。本稿での引用は、遺稿をベースとしつつ、適宜「ムアラカラン閑話」の修正加筆箇所を生かしながら行った。
- (48) 神戸事件については、山本武利「陸軍中野学校―「秘密工作員」養成機関の実像―」(筑摩書房、二〇一七年)の第四章が詳述しており、それを参照の上、引用を行った。
- (49) 前掲「昭和一四年度学生入所景況の件」CO1004842000。
- (50) 前掲、山本『陸軍中野学校』九〇―九二頁。
- (51) 同右、一〇五頁。
- (52) 前掲、中野校友会編『陸軍中野学校』一〇一頁。
- (53) 井上治「解説」柳川著、井上編著『カプテン柳川留魂録』所収、一六九頁。柳川は戦後三〇年を経てなお、自分は「誠」を押し通すように努力していく、その点、天地に恥じないと強調している。『元戦友に送る―インドネシアと共に三三年―柳川宗成氏(専門部一〇期)講話録』(創立百年史編纂室シリーズNo.34、拓殖大学創立百年史編纂室、二〇〇一年)所収、三八頁、カセットテープの録音を起こしたもの。晩年の柳川は「誠」の字の右側部分「成」に「ノ」を入れないで書いた。日本人には真の誠が欠けている、誠が欠けていては異民族との真の交流は不可能であり、誠が入ったときに「成」の「ノ」を入れるというのが彼の信念であったという(同右、七一頁)。同じころ柳川はインドネシアの自宅玄関前に「誠」と自ら書いた大きなプレートを立てていたほどで、六〇歳を超えた彼がいかにその文字を重視していたかがうかがえる(『カプテン柳川留魂録』八八頁写真)。
- (54) 柳川著、井上編著『カプテン柳川留魂録』所収の「ムアラカラン閑話」七八頁。この箇所は遺稿よりも洗練された文章に修正されているため、そちらを引用した。
- (55) 関東軍防疫給水部(七三一部隊)の石井部長に関するこの一節は『カプテン柳川留魂録』所収の「ムアラカラン閑話」七九頁。『陸軍諜報員柳川中尉』、遺稿には記されていない。

- (56) 西原征夫『全記録ハルビン特務機関―関東軍情報部の軌跡―』(毎日新聞社、一九八〇年)、八九、二七六頁。この森林警察隊制度を確立したのはハルビン特務機関長の安藤麟三大佐で、その安藤機関長を支えた一人がやがて後方勤務要員養成所長となる秋草少佐であった(同書四八、五〇頁)。
- (57) 中嶋万藏編「内蒙古自治運動から蒙古自治政府解消までの年表及関連記事一覧表」一九頁、森松俊夫「蒙疆八年の守り―駐蒙軍の歴史―」三九頁、いずれも『思出の内蒙古 内蒙古回顧録』(らくだ会本部、一九七五年)所収。前者年表では日月寮は一九三九年四月創設となっているが、通りあえず森松論稿の指摘する三九年一月開設の方を採用した。
- (58) 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典〔第二版〕』(東京大学出版会、二〇一八年第二版第三刷)、三三四頁。
- (59) 遺稿第一章一頁、通し八一―八五頁。
- (60) 柳川は村上が第六課長であったとしているが、当該期の課長は唐川安夫大佐、天野正一大佐であり、村上中佐は同課長の下にある南方班長であった可能性がある。
- (61) 遺稿第二章六―八頁、通し五五〇―五五二頁。ちなみに新婚の市来をジャワ行きに誘った柳川自身もその一月に別府で結婚している(柳川著、井上編著『カプテン柳川留魂録』所収の年譜、一四七頁)。
- (62) 後藤乾一『火の海の墓標―ある(アジア主義者)の流転と帰結―』(時事通信出版局、二〇〇七年)、一二五、一五七―一六一頁。
- (63) 六川正美「ジャワ作戦の思い出」『プラバタンガンビル』第二号、一九八七年五月(ジャワ参謀部別班会発行)、二四三、二五二頁。
- (64) 土屋競「広い視野に立って働いた別班」『プラバタンガンビル』第二号、五九頁。
- (65) 木村竹治「南太平洋戦陣回顧」木村、庭野静三『ジャワ攻略戦とガダルカナル玉砕戦』(共栄書房、一九八二年)所収、六〇頁。
- (66) 前掲、土屋「広い視野に立って働いた別班」四八―五四頁。
- (67) 柳川『陸軍謀報員柳川中尉』六一―八頁。
- (68) 主に遺稿第一章一―二頁、通し三―一四頁。前掲『陸軍謀報員柳川中尉』にも同様の説明がある。

- (69) 同右。
- (70) 遺稿第一章一五―一七頁、通し一七―一九頁。引用にあたっては省略個所を「……」で示し、読みやすさを考慮して適宜句読点を補い行間を詰めた。また遺稿ではカタカナの文字にすべてかぎかつこが付けられているが、それらはみな取り払った。以下同様。
- (71) 前掲、土屋「広い視野に立って働いた別班」七三頁。長文にわたる個所は段落で区切って引用した。
- (72) 同右。
- (73) 遺稿第一章三九―四一頁、通し四一―四三頁。この場面は『陸軍諜報員柳川中尉』『カプテン柳川留魂録』には載っていない。
- (74) 細澤政男『蜜柑の皮―ニューギニア戦線―陸戦隊員の手記―』（私家版、東海美術社印刷・製本、一九九七年）、一〇七―一〇八頁、奈良県立図書館・戦争体験文庫所蔵。
- (75) 石黒堅『一銭五厘従軍記』（私家版、北日本新聞開発センター編集・製作、とうざわ印刷工業印刷、一九九六年）、六二―六三頁、奈良県立図書館・戦争体験文庫所蔵。一方、敗戦後、在ジャワ日本軍の戦争犯罪容疑者は戦勝国側から別の形で非人道的な復讐を受けた。曾根大尉はシンガポールのチャンギ刑務所でオランダ兵によってリンチを加えられ、スラバヤの憲兵分隊長であった山本少佐はリンチの上死亡させられた。暴行殺害以外にも、半日以上炎天下での直立不動を課す、手枷足枷をして独房へ一週間入れる、罰と称して食事を与えない、被服や薬品を横領するといったことが行われた（前掲、土屋「広い視野に立って働いた別班」四三、一〇〇―一〇一頁）。柳川の場合、独房を監視するハフカス（混血）の元蘭印兵から「思いきり突き飛ばされ」たり、取り調べを行ったオーストラリア軍のハンソン大尉から木槌で指を強打され爪を割られた（柳川『陸軍諜報員柳川中尉』二四六―二四七頁）。
- (76) 前掲、土屋「広い視野に立って働いた別班」七六―七七頁。
- (77) 遺稿第二章四九頁、通し一〇九頁。
- (78) 柳川『陸軍諜報員柳川中尉』二三―三九頁、遺稿第二章四頁、通し六四頁、第三章一〇頁、通し一四〇頁。
- (79) 前掲、六川「ジャワ作戦の思い出」二四五―二四六頁。
- (80) 遺稿第二章一〇―二〇頁、通し七〇―八〇頁。

(81) 以下、遺稿第五章一―四頁、通し二四九―二六三頁。この個所は『陸軍課報員柳川中尉』にも載っているが、遺稿の方が詳しく記されているので、それに依拠して引用した。

(82) 柳川『陸軍課報員柳川中尉』七五頁。

(83) 別稿として本稿の続編というべき「ジャワにおける陸軍中野学校出身者の情報・工作活動とその光の局面―柳川宗成大尉の遺稿から―」を『Intelligence』第二四号、二〇二四年三月発行に掲載する予定である。

〔付記〕 本稿執筆にあたっては、拓殖大学創立百年史編纂室（現・拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室）の非常勤嘱託、専門員でいらした宮澤正幸先生より柳川遺稿を活用、公開することへの温かいご承認を頂いた。宮澤先生は創立百年史編纂室において多年にわたり拓大の刊行物に健筆を振るってこられた。残念ながら同先生（一九三〇年二月生）は二〇二二年三月に九一歳をもって事業室から退職されたが、いつもカートを引きながら同室に來られ、資料の山に埋もれながら地道に仕事をされていたお姿が忘れられない。二〇二三年二月現在、先生はご入院中であり、一刻も早いご回復をお祈りしている。

また拓殖アーカイブズ事業室の主幹である長谷部茂先生（拓大国際日本文化研究所教授）は柳川に関係した資料の所在について知悉されており、それらを閲覧させて頂く上で多大なご協力を頂戴した。事業室をくり返し訪ねるたびに、同先生は嫌な顔一つせず、快く資料を提示され、アドバイスを下さった。さらに長年インドネシア、日伊関係を研究してこられた井上治先生（拓大政経学部教授、副学長）からは、国内図書館にはほとんど収蔵されていない『ポゴール通信』をはじめとする貴重な資料のご提供をたまわった。ジャワ防衛義勇軍関係者がまだご健在であった一九九〇年代、井上先生が森本武志元少尉などから聞き取りを行い、その上でまとめて行かれたご研究は後進にとつてまことにありがたい文献となっている。

なお本稿は、山本武利先生（一橋大学・早稲田大学名誉教授）が主宰されるNPO法人インテリジェンス研究所・第四八回課報研究会（二〇二二年一月一〇日）で行った報告を下地としている。当日は早稲田大学早稲田キャンパスにおいて対面、オンラインのハイブリッド形式で発表を行ったが、その際に参加者の方々から貴重なご質問やご示唆を頂くことができた。

以上の皆様のご協力、ご支援にこの場をお借りして心より御礼申し上げます次第である。

末事となるが、学部生時代から親切に学問の手ほどきをして下さった玉井清先生に深甚なる感謝を捧げたい。毎夜、帰宅の電車に同席させて頂き、様々なお話をうかがった当時の昨日のことに思い出される。玉井先生の温かいお心遣いは、今日に至るまで私にとって大きな糧となっている。